

Vinaya 研究

原 實

K.R.Norman はその “Brahmanical Terms in a Buddhist Guise” と題する論稿の中で、ヒンズウ教と仏教が同じ術語を用いていてもその意味内容を異にしている用例のある事に着目し、その幾つかを列挙しているが、¹ その様な視点からここに掲げる vinaya の語を見た場合どのようなであろうか。² 通常この語は漢訳仏典で「毘奈耶」と音寫され、「律」と意識されているが、梵文学一般におけるその語義を確定するためには叙事詩、抒情詩、戯曲等古典梵語文献よりその用例を蒐集し、それらを整理して検討する必要がある。この様な問題意識から、筆者は過去半世紀に亘り資料の蒐集を心掛け、それらを約800枚のカードに収めたが、科学技術の発達した現在から見ればそれは全くの徒労に過ぎず、後輩の失笑を免れない。用例を網羅する事はもとより不可能で、将来より有能な後輩に期待する以外にないが、分類の基準を設定しその下に幾つかの用例を掲げて置く事も強ち無意味でないであろう。以下に筆者の蒐集した所を整理して提示することとする。

本稿は今から20年前平川彰博士が古稀を迎えた時、早稲田大学で献呈論文集の企画を仄聞し、博士の「戒律研究」に因んで密かに用意しておいたものである。但しその折誘いを受ける事がなかった為、発表の機会なきまま筆者はこれを久しく篋底に秘した。今回再度それを取り出す事となったが、発表の機会が祝賀でなく追悼となり、博士生前に献呈し得なかった事を遺憾とする。尚、本稿は2003年11月26日、本学の研究会に於ける口頭発表を経て現形を得た。その席に参加して種々教示を賜った各位に深甚なる謝意を表する。

¹ Norman 1993.

² Cf. Dhadphale pp.197-209.

詳論に入るに先立って、先ず仏典の「律」とは凡そ対蹠的にして、且つ宗教的意義の対極に位するこの語の用例を見るに、それは妖艶な男女性愛の文脈に見出だされる。

*uttarīya-vinayāt trapamāṇā rundhatī kila tad-ikṣaṇa-mārgam
āvariṣṭa vikāṭena vivodhur vakṣasaiva kuca-maṇḍalam anyā
(Śīsupālavadhā 10.42)*

今一人の女は上衣剥奪 (*uttarīya-vinaya*) に当惑し、夫の視線を遮らんと、彼の広き胸板により、(自らの) 豊満な乳房を覆えり。³ 女性が自ら進んで愛人の堅き抱擁を求めるのは、上衣剥奪により乳房の露わになるのを恥じ怖れる故と言われる。

同様の用例はこの語の動詞形にもみられる。

*ambaraṃ vinayataḥ priya-pāṇer yoṣitaś ca karayoḥ kalahasya
vāraṇām iva vidhātum abhīkṣṇaṃ kakṣyayā ca valayaś ca śīśiṅje
(Śīsupālavadhā 10.62)*

(女の) 帯と腕飾りの間断なく軋み且つ響くは、衣を脱がしつつある愛人の片手と、(それを拒まんとする) 乙女の両手の争いを停めんとするが如し。⁴

この様に女性の「上衣」(*uttarīya*) 「衣服」(*ambara*) の「剥奪」が、*vinaya* 及びその動詞原形 (*vi-nī-*) によって示されているが、同じ動詞形は次下の「除去」の文脈に現れる。そこで男は愛人の眼に入った花粉を懇ろに取り除く。

*vinayati sudrśo drśaḥ parāgaṃ praṇayini kausumam ānanānilena
tad ahita-yuvater abhīkṣṇam akṣṇor dvayam api roṣa-rajobhir
āpupūre*

³ 注釈 Mallinātha は *uttarīya-vinaya* の合成語を *kucāṃśukākaraṣaṇa* と釈するから、それは現代語に於ける「ブラジャーを脱がす事」に他ならない。

⁴ Mallinātha は *vinayataḥ* を *apasārayataḥ* と釈するから、それは女性の着用している衣服の「剥奪」、脱がす事に他ならない。

(Śiśupālavadhā 7.57)

心を許すそのひとが、⁵ 眼麗しき乙女の片眼より、息吹きかけて花粉を払う時 (*vinayati=apanayati: Mallinātha*)、恋敵 (の乙女) の両の眼は、あだし怒りの情に満つ。⁶

ここに我々は禁欲的宗教的な仏教の「律」*vinaya* と浪漫的世俗的な「性愛」文脈の *vinaya* との間には大きな隔たりのある事を知るが、聖俗の両極に位する両者は如何にして互いに関連し合うであろうか。以下に我々は両者が幾つかの接点を見出しつつ最終的に連関する事情を、用例に徴して検討するであろう。それは衣類「剥奪」から「律」を経由して最終的には「拘束」に到る如くである。以下の各節はこの様な視点よりこの語の現れる文脈を分類整理したもので、各章は位相を異にしつつ、最終的にこの両極を結ぶ様に配列されている。

もと *vinaya* は動詞 *nī-* と動詞前接辞 *vi-* の合成動詞形であるから、それは広く一般に「除去」(take away, remove) を意味し、上記の「剥奪」も衣類との連合に於いて偶々意味が狭められた結果に過ぎない。然らば「除去」一般は「衣類」「花粉」のほかにもどの様な名詞と連合するであろうか。

以下この語を論じるに当り、この語と連合する対象に準じて、一応次の4に分類するを便宜とする。その第一は *vi-nī-* 乃至その派生形 (*vinaya*, *vinay-ana*) が、人間の生理的情意的現象を対象とするもの、第二はそれが人間そのものを対象としている文脈を扱う。次にその否定形 *avinaya* を始めとしてそれに連関する諸語を論じて一応の結論に導く。そして最後に一章を設けて残余の諸問題を扱うこととする。

⁵ For *praṇaya*, see Hara 2002.

⁶ *vinī- :āpṛ-* の対蹠及び *rajas* の Wortspiel.

(1-1) 「癒し」

vinaya の対象が生理的肉体的に不快なものである場合、それは「癒し」となる。

(1-1-1) *trṣṇā-vinayana* (渴)

老盲王 Dhṛtarāṣṭra は前非を悔い、罪障消滅のため難行苦行に身を委ねる。

caturthe niyate kāle kadācid api cāṣṭame
trṣṇā-vinayanam bhuñje gāndhārī veda tan mama (MBh.15.5.10)

時を違えず第四時に、時に又第八時に、余は僅かに渴を癒すのみ。

(妻) Gāndhārī もこれを知る。

(1-1-2) *adhva-śrama-vinayana* (道中の疲労)

āsīnānām surabhita-sīlaṃ nābhi-gandhair mṛgāṇām
tasyā eva prabhavam acalaṃ prāpya gauram tuṣāraiḥ
vakṣyasy adhva-śrama-vinayane tasya śṛṅge niṣaṇṇaḥ
śobhām śubhra-trinayana-vṛṣotkhāta-paṅkopameyām
(Meghadūta 52)

汝が、その(川の)源、峯は屯する鹿の麝香のかおり豊かに芳わしく、雪霜に真白き泰山に到って、旅の疲れ⁷を癒さんとその高嶺に座する時、汝は三眼の神(シヴァ)の跨る(白)牛の蹴上し清き土塊に比すべき趣湛えん。⁸

(1-1-3) *kapola-kaṇḍu* (痒み)

それは又人間のみならず、動物にも適用される。深山に象が額の痒みを払う為、木々にそれを叩きつけて搔く様を描く、雄大な Kumārasambhava の序章に言う。

kapola-kaṇḍūḥ karibhir vinetuṃ vighaṭṭitānām sarala-drumāṇām

⁷ Cf. also *adbhiś cāpi śramo nityam vinayaḥ kāla-darśibhiḥ* H.75.11ab.

⁸ 白山にその身を寄せる黒雲との対照である。

yatra sruta-kṣīratayā prasūtaḥ sānūni gandhāḥ surabhī-karoti
(*Kumārasambhava* 1.9)

額の痒み癒す為、象の群れの傷つけたる松の木々、そこに自ずと樹液流せば、その香は峯々を芳わしからしむ。

(1-2) 「払拭、排除」

vinaya の対象が不快な肉体的生理的なものから精神的感情的なものに移行すると、それは「払拭、排除」となる。その対象は勢い消極的、否定的なものとなる。

(1-2-1) *duḥkha* (苦)

造物主梵天より残酷な命令を受けた「死の少女」はその実行を怖れて懇願する。

vinīya duḥkham abalā sā tv atīvāyatekṣaṇā
uvāca prāñjalir bhūtvā latevāvarjitā tadā (*MBh.12.250.1*)

切れ長の眼のかの少女は苦を払い、合掌なし、蔓草の様に体を屈めて、次の様に言った。⁹

(1-2-2) *jvara* (悲嘆)

消沈せる兄 Rāvaṇa を激励して Kumbhakarṇa は次の様に言う。

ramasva kāmaṃ piba cāgrya-vāruṇīm
kuruṣva kṛtyāni vinīyatām jvaraḥ
mayādya rāme gamite yama-kṣayaṃ
cirāya sītā vaśagā bhaviṣyati
(*R.6.51.47*)

欲するままに享樂なし、美酒を賞で、己が義務に専念し、悲嘆を去れ。本日ここに余が Rāma を屠れば、Sītā は永く汝の意に従うものとならん。

⁹ *vinīya khalu tad duḥkham āgataṃ vaimanasya-jam*
dhyātavyaṃ manasā hr̥dyaṃ kalyāṇaṃ saṃvijānatā (*MBh.12.219.6*)
ramasva rājan piba cādya vāruṇīm kuruṣva kṛtyāni vinīya duḥkham
mayādya rāme gamite yama-kṣayaṃ cirāya sītā vaśagā bhaviṣyati
(*R.6.51.47*)

(1-2-3) *āyāsa* (憂愁)

不吉な夢に心愁う王子 Bharata を囲み、僚友達は気晴らしの為、お伽や歌舞音曲を以て彼を慰める。

tapyamānaṃ samājñāya vayasyaḥ priya-vādiṇaḥ
āyasaṃ hi vineṣyantaḥ sabhāyāṃ cakrire kathāḥ (R.2.63.3)

彼の悩めるを知りその友は、その憂慮を払わんと、言葉優しく会堂にて、様々なお伽をなせり。

(1-2-4) *hṛdaya-granthi* (心のしこり)

Sādhya 神群の問いに対して Haṃsa 鳥の姿を取れる大仙 Ātreya は言う。

etat kāryam amarāḥ saṃśrutaṃ me
dhṛtiḥ śamaḥ satya-dharmānuvṛttiḥ
granthiṃ vinīya hṛdayasya sarvaṃ
priyāpriye cātma-vaśaṃ nayīta
(MBh.5.36.4)

神々よ、「満足して心平安、真実と人倫の道を尊しとなし、心の蟠りを悉く払い、快も不快も共に、等しく己が制御の下に置くべし」とは人の勤めと我は聞く。

(1-2-5) *bhaya* (恐怖)

大戦の大団円、池に身を隠す敵将 Duryodhana に Yudhiṣṭhira は言う。

sa tvam uttiṣṭha yudhyasva vinīya bhayam ātmanaḥ
ghātayitvā sarva-sainyaṃ bhrātṛṃś caiva suyodhana (27)
nedānīm jīvite buddhiḥ kāryā dharmā-cikīrṣayā (MBh.9.30.28ab)

さればいざ立て Suyodhana、己が恐怖を去って戦うべし。軍隊凡て、更に己が同胞を死に到らしめた現在、尚己が命を惜しむべからず、汝、人の道を貴しとなさんとすれば。

(1-3) 「破碎」

それが、戦場に於ける敵将の戦闘意欲に適用される場合、「払拭、排除」は更に「破碎」に発展する。宣戦布告の文脈にはこの種の用例が多い。戦

場に雌雄を決せんとする勇将は敵将の戦闘意欲、必勝確信 (*śraddhā*) を砕かんとして戦場に臨むから、その様な場合「除去」は「破碎」に通ずる道理である。

(1-3-1) *yuddha-śraddhā*¹⁰

tiṣṭha tiṣṭha na me jīvan droṇa-putra gamiṣyati
yuddha-śraddhām ahaṃ te 'dya vineṣyāmi raṇājire
 (MBh.7.131.62)

待て、待て、汝は生きて帰還する事¹¹あるべからず。余は今日唯今汝の必勝確信を戦いの庭に砕いてくれよう。¹²

kiṃ kattthitena bahudhā yudhyasvādya mayā saha
adya te 'haṃ vineṣyāmi yuddha-śraddhām vṛkodara
 (MBh.9.32.46)

大言壮語多言を止めよ。今日唯今我と戦え。余は汝の戦闘意欲を破碎せん。

(1-3-2) *darpa*

(1-3-2-1) 上に準ずるものとして *darpa* がある。「必勝を確信しての戦闘意欲」(*yuddha-śraddhā*) に燃える者の「驕り、昂ぶり」を破碎せんとするのは一騎打ちに臨む勇士に共通している故である。

anuktvā samare tāta śūrā yudhyanti śaktitah
sa yudhyasva mayā śaktyā vineṣye darpam adya te (MBh.8.17.54)
 不言実行、勇士達は戦場に力の限り戦えば、汝は我と力の限り戦うべ

¹⁰ Cf. Hara, 1992.

¹¹ Cf. Hara 1996.

¹² Cf. also,

sarva-śastrāṇi cādatsva yojayasva ca vāhinīm
ahaṃ hi te vineṣyāmi yuddha-śraddhām itaḥ param (MBh.5.94.24)
guṇa-bhūtāni bhūtāni tatra tvam upabhokṣyase
tatra te 'haṃ vineṣyāmi brahmatvaṃ yatra cechasi (MBh.13.119.7)
yāvad aśya śitair bāṇaiḥ saṃrambhaṃ vinayāmy aham
yuddha-śraddhām ca kaunteya jīvitasya ca saṃyuge (MBh.7.169.56)

し。我は今日、汝の驕りを破碎せん。¹³

ekaikaśaḥ samarthāḥ smo vijetuṃ sarva-pārthivān

āgacchantu vineśyāmi darpam eṣāṃ śitaiḥ śaraiḥ (MBh.5.54.19)

我等は一人づつにても凡ての王に打克ち得。されば来たれ、余は鋭き
矢もて彼等の驕りを破碎せん。¹⁴

(1-3-2-2) *vinaya* と *darpa* が対立する概念である事は次の章句からも知られる。

tad yuddham abhavad ghoraṃ deva-dānava-saṃkulam

kṣamā-parākrama-mayaṃ darpasya vinayasya ca (H.37.21)

神々と悪魔の間に恐ろしい戦争が起った。忍耐と暴力、驕りと自制の間にも。¹⁵

(1-4) 「制御、抑制、調伏」

上の「驕り」(*darpa*) は「悪徳」の一に数えられるから、それは必然的に「悪徳一般」に移行し行く道理である。そして「悪徳一般」の「除去、破碎」はそれらの「制御、抑制、調伏」に通じる。

(1-4-1) 既に Pali 仏典には所謂「貪瞋痴」の「三毒」が *vinaya* の対象となっている。

(1-4-1-1) 「三毒」

*ahaṃ hi Stha vinayāya dhammaṃ desemi rāgassa dosassa
mohassa aneka-vihitānaṃ pāpakānaṃ akusalānaṃ dhammānaṃ*

¹³ Lec. var.: *haniṣye, vinaśyed for vineśye.*

¹⁴ Cf.

eṣo yotsyāmi vaḥ sarvān nivārya śara-vāgurām

tiṣṭhadhvaṃ yuddha-mānaso darpam vinayitāsmi vaḥ (MBh.14.77.5)

śiḡhram eva hi rākṣasyo vikṛtā ghora-darśanāḥ

darpam asya hi vineśyantū māṃsa-śonita-bhojanāḥ (R.3.54.24)

¹⁵ Cf. lso,

tat surāsura-saṃyuktaṃ yuddham atyadbhutaṃ babhau

dharmādharmā-samāyuktaṃ darpeṇa vinayena ca (H.35.3)

vinayāya dhammaṃ desemi (Vin. 1.235.26-27=3.3.9-11=AN.4.175.6-9)

シーハよ、余は貪¹⁶瞋痴、並びに諸種の悪法、不善法を払う為に法を説く。

「三毒の調伏」(*vinaya*) は涅槃と同義 (*adhivacana*) であると言われる。

nibbāna-dhātuyā kho etam bhikkhu adhvācanam rāga-vinayo dosa-vinayo moha-vinayo ti (SN.5.8.11-12)

比丘よ、貪欲の制御、憎悪の調伏、迷妄の排除は涅槃界の呼称¹⁷に他ならない。¹⁸

又、Pali 仏典に繰返される定型句に言う。

idha bhikkhave bhikkhu sammā-diṭṭhim bhāveti/rāga-vinaya-pariyosānaṃ dosa-vinaya-pariyosānaṃ moha-vinaya-pariyosānaṃ

(SN.5.31.24-26=32.13-15,34.15-17,etc.)

比丘達よ、ここに比丘あり、彼は貪瞋痴の調伏に究極する「正見」を修習すべし。¹⁹

(1-4-1-2) のみならず、欲 (*icchā*)、怒 (*kodha*)、覆 (*makkha*)、諂 (*sāṭṭheyya*)、誑 (*māyā*) の五もこの語の対象となった。

puna ca paraṃ bhikkhave bhikkhu pāpiccho hoti icchā-vinayassa na vaṇṇavādī.....kodha-vinayassa..., makkha-vinayassa..., sāṭṭheyya-vinayassa..., māyā-vinayassa... (AN.5.165.6-7,12,17,22,27)

¹⁶ For *chanda-rāga-vinaya*, cf. SN.4.7.9, 13, 19.

¹⁷ For *adhivacana* “metaphoric or parabolic synonym,” cf. Dhadhphale pp.171-196.

¹⁸ Cf. SN.5.8.8-10.

¹⁹ Cf. 5.40.21-22, 42.19-21, 5.137.25-26, 5.241.23-25=242.22-23, 252.4-5=253.11-12 and AN.5.238.11-13, 15-17, 239.13-14, 18-19.

更にまた比丘達よ、悪欲の比丘あり、欲望²⁰、憤怒、偽善、狡猾、欺瞞の制御を称賛せず。²¹

(1-4-1-3) その他この語は「自意識、自驕」(*asmi-māna*)²²、「怨恨」(*upanāha*)²³、「渴愛」(*pipāsā*)²⁴とも連合し、又古く Suttanipāta 921 には *parissaya-vinaya* (危難の排除) の合成語も見える。

(1-4-1-4) Pali 仏典に於いて、「律」に固まらない以前のこの語の用例と、「律」そのものとの関係は興味ある問題と思われるが、今は触れない。唯、随所に散見する *ariyassa vinaye*²⁵ の解釈は微妙であろう。

自ら「三明婆羅門 (*te-vijja*)」の意義を説いたバラモン Tikaṇṇa は、仏に見えて仏教に於けるその意味を聞き、佛に帰依したが、そこでこの句は「(我等) 仏教徒の間では」の意味に用いられている。

*aññatha kho brāhmaṇa brāhmaṇā brāhmaṇaṃ tevijjaṃ
paññapenti, aññathā ca pana ariyassa vinaye tevijjo hotīti
yathākathaṃ pana bho Gotama ariyassa vinaye te-vijjo hoti.
sādhu me bhavaṃ Gotamo tathā dhammaṃ desetu yathā ariyassa
vinaye te-vijjo hotīti (AN.1.163.16-19)*

バラモンよ、(貴方がた) バラモン達が三明婆羅門を説くのと、聖者の訓練に於いてそれが説かれるのとは異なる。

Gotama よ、それなら聖者の訓練に於いて三明者とはどの様な者ですか。何卒、聖者の訓練に於ける三明者がどの様な者か教えて下さい。品行方正ならざる比丘に就いて次の様に語られる。

²⁰ For *icchā-vinaya*, cf. also AN.4.15.12 nd SN.1.40.22.

²¹ この章句の漢訳相当箇所を畏友堀伸一郎氏が精査したところ、それは増壹阿含経ではなく、中阿含経巻23 (大正 1 p.576ab) に見出される事が判明した。そこには「止悪欲」(576a26) の語が見えるから、ここで *vinaya* の訳語に「止」の語が当てられていた事が判明した。

²² *asmi-mānassa yo vinayo etaṃ ve paramam sukham* Vin.1.3.30.

²³ *kodho-vinayo ca upanāha-vinayo ca* AN.1.91.20.

²⁴ *pipāsa-vinayo ālaya-samugghāto...* AN.2.34.25.

²⁵ この句の存在に就いて Deleanu Florin 教授の教示を得た。

*maraṇaṅhetam bhikkhave ariyassa vinaye yo sikkham
paccakkhāya hināyāvattati (SN.2.271.13-14)*

教えを捨てて墮落する如き者は、聖者の訓練に於いて死に等しい。²⁶

(1-4-2) 次に同じ視点から梵文学の用例を検討するが、用例が極めて多数に昇るので便宜上過去分詞形 *vinīta-* と定動詞形 *vi-nī-* の二に分ける。

(1-4-2-1) 過去分詞 *vinīta-* が合成語の前分に立つ場合、その後分に仏典と同類の概念が現れる。

(1-4-2-1-1) *vinīta-rāga* (愛染)

*ajagara-caritaṃ vrataṃ mahātmā
ya iha naro 'nucared vinīta-rāgaḥ
apagata-bhaya-manyu-lobha-mohaḥ
sa khalu sukhī vihared imaṃ viharām (MBh.12.172.37)*

この世に於いて、(大蛇) Ajagara の旨とせる生活信条を踏み行く大人は、愛染を抑制し、恐怖、憤懣、貪欲、無知を去って幸せに安住なす。

(1-4-2-1-2) *vinīta-moha* (迷妄)

遊行期の生活法を Vyāsa は息子 Śuka に明かして言う。

*agarhaṇīyo na ca garhate 'nyan
sa vai vipraḥ paramātmānam ikṣet
vinīta-moho vyapanīta-kalmaṣo
na ceha nāmutra ca yo 'rtham ṛcchati (MBh.12.237.35)*

自らは他人に咎められず、さりとして他人を咎めぬかのバラモンは、迷妄を去り、穢れを払い、彼此両世界に何物も求めず、最高我を見る事が出来る。

この他、上記 Pali 仏典の「瞋」に相当する悪徳以下を列挙すれば以下の如くである。

²⁶ Cf.

*na kho pan' ete Cunda ariyassa vinaye sallekhā vuccanti, ditṭha-dhamma-
sukha-vihārā ete ariyassa vinaye vuccanti (MN.1.40-41=1.41.17-18, 23-24)*

(1-4-2-1-3) *vinīta-krodha-harṣa* (喜怒哀楽)

五王子の悲運を嘆き、その母 Kuntī は Kṛṣṇa に向かって言う。

nikṛtyā bhraṃśitā rājyāj janārhā nirjanam gatāḥ
vinīta-krodha-harṣās ca brahmaṇyāḥ satya-vādināḥ (MBh.5.88.6)

もと賑やか好きの²⁷彼等は、騙されて王国を失い、人気無き里に赴けり。喜²⁸怒(哀楽)を制し、敬虔にして常に真実を語る彼等は。²⁹

(1-4-2-1-4) *vinīta-roṣa-trṣṇā* (怒り, 渴望)

Prahlāda の問いに答え遊行者は Ajagara-vrata を説いて言う。

tad aham anuniśāmya viprayātaṃ
prthag abhipannam ihābudhair manuṣyaiḥ
anavasitam ananta-doṣa-pāraṃ
nrṣu viharāmi vinīta-roṣa-trṣṇaḥ (MBh.12.172.36)

愚人共の夫々に誤解し理解せぬも、無限の過失の彼岸なる(この大蛇の誓)を余は理解なし、怒りと渴を抑制しつつ、人々の間に愉しむ。

(1-4-2-1-5) *vinīta-kilbiṣa* (敵意)

Śikhaṇḍinī の性転換が成就した時、娘の結婚相手が女でないかと疑った隣国の王は嫌疑が晴れて喜んで帰って行った。

vinīta-kilbiṣe prīte hemavarmaṇi pārthive
pratiyāte tu dāsārṇe hr̥ṣṭa-rūpā śikhaṇḍinī (MBh.5.193.29)

敵意を去って満悦し、Daśārṇa 王 Hemavarman が帰還して行った時、Śikhaṇḍinī は喜色満面の態であった。

(1-4-2-2) 但し、合成語の後分に現れる語は必ずしも常に「悪徳」とは

²⁷ *jana-arha* の合成語は「人民に敬われ、多くの人に囲まれてあるべき」の義に取る事も可能である。*jana* の語義に就いては cf. Hara 1968.

²⁸ *kutaḥ krodho vinītānām lajjā vā kṛta-cetasām: Pratimānātaka* 6.9ab.

²⁹

vinīta-krodha-harṣā hi mandā vanam upāśritāḥ
vinā vadhaṃ na kurvanti tāpasāḥ prāṇa-yāpanam (MBh.12.15.24)
neha śastrena kartavyaṃ śāntānām ayam ālayaḥ
vinīta-krodha-harṣānām brāhmaṇānam tapasvinām (MBh.3.38.33)

限らない。「制御、抑制」の対象は「自己」となる例が多い。

(1-4-2-2-1) *vinīta-ātman*

Lakṣmaṇa を迎える猿王 Sugrīva を描いて、

*taṃ sadāro vinītātmā sugrīvaḥ plavagādhipaḥ
pūjayā pratijagrāha prīyamāṇas tad arhayā (MBh.3.266.13)*

猿王 Sugrīva は喜び、妻を伴い威儀を正して行儀よく (courteous: van Buitenen)、相応の礼を尽くして彼を迎えた。³⁰

逆に *a-vinītātmān* の用例は YS に見える。

*evaṃ-ṛtto 'vinītātmā vitathābhiniveśavān
karmaṇā dveṣa-mohābhīyām icchayā caiva badhyate (YS.3.155)*

斯く振舞い、自己陶冶する事なく、無益な業に耽る者は、業、憎悪、迷妄、欲望に縛られる。³¹

(1-4-2-2-2) *vinīta-veṣa*

身を窶して苦勞の末に幽閉中の Sītā を見つけた Hanumat を描いて、

*so 'vatīrya drumāt tasmād vidruma-pratimānanaḥ
vinīta-veṣaḥ kṛpaṇaḥ praṇipatyopasṛtya ca
(R.5.33.1Bombay=5.660*Baroda p.227)*

珊瑚のような顔をした彼は、慎ましい衣服に身をまとい、哀しげに、敬礼して近づき。³²

更に、法廷に入場する時の王の装束を規定して法典は言う。

³⁰ Cf. MS.7.39 (*vinītātmā hi nrpatir..*), MBh.12.184.8.3 (*saṃyag atra śauca-saṃskāra-vinaya-yama-praṇīto vinītātmā*) and H.3.104.15Bombay (*sa ca vipro vinītātmā*). As for *vinīya cātmanam*, cf. MBh.12.258.73. There is also the compound *vinīta-mukha* in H.2.108.7Bombay, which the Critical edition reads *vṛḍḍita-mukha* (H.99.33).

³¹ For *avinītaś ca duṣṭātmā*, cf. MBh.4.20.25.

³² *śarair apadhvasta-vinīta-veṣam* の句は R.7.7.50Bombay に見えるが、Baroda 版 (R.7.7.44) はこれを取らない。但し Bombay 版の場合も「衣を剥ぎ取られ」の義で「地味」の義はない。

*vyavahārān didr̥kṣus tu brāhmaṇaiḥ saha pārthivaḥ
mantra-jñair mantribhiś caiva vinītaḥ praveśet sabhām (1)
tatrāsīnaḥ sthito vāpi pāṇim udyamya dakṣiṇam
vinīta-veśābharaṇaḥ paśyet kāryāṇi kāryiṇām (MS.8.1)*

訴訟事件を審理しようとする王は、バラモン及び助言に通じる顧問官を伴い、慎ましやかに (*vinīta*) 法廷に入るべし (1)

節度ある衣服及び装身具をつけ、そこに於いて座るなり立つなりして、右手を挙げ、(訴訟) 当事者達の事件を審理すべし (2)

これらの用例に見る如くこの合成語は「煌びやかでない、地味な装束」の義で、一般に *vinīta* には「慎ましやか」な意味合いが籠められている。³³

(1-4-2-2-3) *vinīta* の語は又しばしば *vinaya-jñā-* と連合して用いられる。

*tataḥ sumantraḥ kākutsthaṃ prāñjalir vākyam abravīt
vinīto vinaya-jñāś ca mātaliḥ vāsavaṃ yathā (R.2.35.9)*

それより Sumantra は合掌して Kākutstha に次の様に言った、恰も羨けられた通りに礼を弁えた Mātali がその昔 Indra に言った様に。³⁴

(1-4-3) 次に定動詞形の用例を見るれば次の如くである。

(1-4-3-1) *manyu* (憤懣)

聖仙 Śaunaka に過去の非行を挙げられて自らの前非を悔いた Janamejaya 王は、その赦しを乞いつつ忠告を求めて言う。

*tat tu śalyam anirhṛtya katham śaksyāmi jīvitum
sarva-manyūn vinīya tvam abhi mā vada śaunaka (MBh.12.147.4)*

されど(後悔の)槍を除かざれば余は如何にして生き延び得ん。須く卿は凡ての憤懣を払って我に(今後為すべき事につき)忠告し給え。

「激情」の抑制は諸々の「悪徳」を対象とするに到り、「抑制」は更に「調伏」となる。

(1-4-3-2) *asūyā* (嫉妬的悪意)

³³ Cf. Medhatithi d MS.8.2 (*anuddhata* for *vinīta*.)

³⁴ Cf. R.2.14.9, 2.33.1, 2.78.10 (*vinaya-jño vinītavat*)

Samjaya は Dhṛtarāṣṭra 王に Vyāsa と Gāndhārī の召喚を求めて言う。

*tau te 'sūyāṃ vinayetāṃ narendra
dharma-jñau nipuṇau niścaya-jñau
tayos tu tvāṃ saṃnidhau tad vadeyaṃ
kṛtsnaṃ mataṃ vāsudevārjunābhyām
(MBh.5.65.7)*

王よ、彼等兩人は人倫の道を知り、賢明なる判定者なれば、必ずや汝の嫉意を払わん。彼等を前にして余は汝に Kṛṣṇa Arjuna 兩人の意の在る所を凡て語り聞かせん。

(1-4-3-3) *mada, krodha, māna, īrṣyā* (傲慢、憤怒、慢心、嫉妬)

*sa vinīya mada-krodhau mānam īrṣyām ca nirvṛtaḥ
nityaṃ pāñcopadhātīṭair mantrayet saha mantribhiḥ
(MBh.12.84.49)*

汝は傲慢、憤怒、慢心、嫉妬を抑止して心平穩に、常に五の陰謀なき大臣と諮れ。

(1-4-3-4) *vega* (衝動)

*vāco vegam manasaḥ krodha-vegam
vivitsā-vegam udaropastha-vegam
etān vegān vinayed vai tapasvī
nindā cāsya hṛdayaṃ nopahanyāt (MBh.12.269.15)*

口意の衝動、憤怒の衝動、知の衝動、食と性の衝動、行者はこれらの衝動を抑制すれば、非難はその心を害する事なし。³⁵

(1-5) 以上我々は四節に亘って、この語が生理的不快を対象とする時「癒し」となり、精神的不快を対象とする時「排除」となり、意欲を対象とする時「破碎」となり、悪徳を対象とする時「調伏」となる事情を見た。次に章を改めて、それが人間そのものを対象としている用例を見るであろう。

³⁵ Cf. *asmāpita-kṛty-saṃpadāṃ hata-vegam vinayena tāvatā (Kīrātārjunīya 2.48ab)*

II

vinaya の語が人間の生理的、感情的なものを対象としている場合は「排除」「抑制」の義となるが、それが感情を有する人間そのものを対象とする場合にはどの様になるであろうか。以下にそれらを順を追って検討していくが、便宜上先ず動物の調教より始める。

(2-1) 「調教」

(2-1-0) 既述の「調伏」の概念は、その対象が野生動物となる場合、それはそのまま「調教」となる。Rāma を描いて次の様に言われる。

ārohe vinaya caiva yukto vāraṇa-vājinām
dhanurveda-vidāṃ śreṣṭho loke 'tiratha-saṃmataḥ (R.2.1.23)
 象馬の騎乗と調教に通じ、弓学の長、世に大騎士の誉れ高く。

又、Rāma に捨てられた傷心の Sītā に聖仙 Vālmiki は言う。

tapasvi-saṃsarga-vinīta-sattve tapo-vane vīta-bhayā vasāsmi
(Raghuvamśa 14.75)

苦行者と交われば、動物達も（凡て）調教された³⁶この庵に怖れなく、住み給え。³⁷

動物の中でも調教の対象は就中次の三つである。³⁸

(2-1-1) 象

大戦争勃発時の有様を記述して言われる。

³⁶ Mallinātha: *sānta-jantu*

³⁷ Cf. R.3.10.84 (*agastyasyāśramaḥ śrīmān vinīta-mrga-sevitaḥ*)

³⁸ Cf.

nāvinītaiḥ vrajeda dhuryair na ca kṣud-vyādhi-pīditaiḥ
na bhinna-śrṅgākṣikḥurair na vāladhivirūpitaiḥ (67)
vinītais tu vrajen nityam āśugair lakṣaṇānvitaiḥ
varṇa-rūpopasaṃpannaiḥ pratodenātudan bhr̥ṣam (MS.4.68)

Cf. also Kullūka (*aśva-gajādibhir vāhanair adamitaiḥ...*)

*prabhinnās ca mahānāgā vinītā hasti-sādibhiḥ
parasparam samāsādyā samnipetus abhītavat (MBh.6.91.26)*

騎手に調教された巨象の群はこめかみより液を分泌しつつ、恰も怖れ
を知らざる如く、互いに近づいては激突せり。³⁹

(2-1-2) 馬

変装中の Nakula は Virāṭa 王に己が技量を披瀝して言う。

*aśvānām prakṛtiṃ vedmi vinayaṃ cāpi sarvaśaḥ
duṣṭānām pratipattiṃ ca kṛtsnaṃ caiva cikitsitam (MBh.4.11.7)*

私は馬の本性を知れば、その調教法、暴れ馬の処置、更に彼等の治療
法も熟知しています。⁴⁰

(2-1-3) 牛

*tasmai pradeyaṃ prāyacchat pṛīto rājā dhanam bahu
vinītān vṛṣabhān dr̥ṣṭvā sahadevasya cābhibho (MBh.4.12.31)*

Sahadeva の調教せる雄牛共を見て王は満悦、彼に応分の報酬として
多くの財産を与えた。⁴¹

³⁹ Cf.

*ye tv ete sumahā-nāgā añjanasya kulodbhavāḥ
idhodaka-pradātāraṃ śūnya-pālakam āśrame
vinītam ācārya-kule suyuktaṃ guru-karmaṇi (MBh.13.105.9)
vinaya-vidhāyini bhagne 'pi cānkuṣe vidyata eva vyāla-vāraṇasya
vinayāya sakala-matta-mātaṅga-kumbha-sthala-sthira-śirobhāga-bhidur-
aḥ kharatarāḥ kesari-nakharāḥ (Harṣacarita 188.14-6)*

⁴⁰

karkāśās ca vinītās ca prabhinna-karaṭāmukhāḥ (MBh.7.87.33)

⁴¹ Cf.

*tathānaḍvāhaṃ brāhmaṇyātha dhuryaṃ
dattvā yuvānaṃ balinaṃ vinītam
halasya voḍhāram ananta-vīryaṃ*

(2-2) 「陶冶」

恰も野生動物が「調教」される如く、幼児や生意気盛りの若者も調教されねばならない。但し人間の場合に「調教」は「陶冶」となる。以下に「陶冶」以前乃至はそれに対立する概念との対蹠に於いて、この語の意味内容を検討するであろう。

(2-2-1) 幼時期

(2-2-1-1) *śaiṣava*

仏僧 Divākaramitra は Harṣa 王を褒め称えて言う。

*asya tv idr̥ṣe śaiśave vinayasyopādhyāyaṃ dhyaṃann api na
saṃbhavāyāmi bhuvi (Haracarita 239.25-26)*

斯かる御幼少の砌に於ける、躰の師 (*vinayasyopādhyāya*) を拙僧
思い巡らすも、尚想像もつきかねる。

(2-2-1-2) *śīśutva*

「悪戯」は「幼児期」と不可分であるから、その否定形 *avinaya* は *śīśutva* や *bāla-bhāva* と連合する。

*janaka iva śīśutve supriyasyaika-sūnor
avinayam pi sehe pāṇḍavasya smarāriḥ (Kirātārjunīya 17.64cd)*

Śiva 神は Arjuna の無礼を我慢した。恰も父親が、その幼少時に、
最愛の一人息子の悪ふざけを赦す如くに。⁴²

(2-2-1-3) *bāla-bhāva*

息子 Rukumin の軽拳を詫びる父 Bhīṣmaka に Kṛṣṇa は慰めて言う。

*bāla-bhāvena putreṇa cālitaṃ nr̥pa-maṇḍalam
yadā bhavati vai prauḍhaḥ kīdr̥śo 'vinayo bhavet
(H.2.51.4Bombay)*

prāpnoti lokān daśadhenudasya (MBh.13.72.43)

42

*sa evaiṣa punaḥ svayaṃkr̥tenāvinyena... (Kādambarī 578.9)
avinaya-niścetano nakha-pratibimbitam ātmānaṃ bahu manyate
(Kādambarī 410.7)*

幼ければ(汝の)息子は王達を振り廻わせど、大胆なりとも(彼に)如何様の無礼かある。⁴³

象に事寄せて、象使いはそれとなく若者に教訓を垂れる。

kari-kalabha vimuñca lolatāṃ cara vinaya-vratam ānatānanaḥ
(*Harṣacarita* 78.11)

この若象め、やんちゃ心 (*lolatā*) を捨てよ、頭を低くして、礼を弁えおとなしく (*vinaya-vrata*) せよ。

幼児期に見られる「やんちゃ」の概念は擬人的に植物にも適用される。Harṣa 兄弟の見た Mādhavagupta の記述に次の如く言われる。

acapala-stimita-tārakeṇādhomukhena cakṣuṣā śikṣayantam iva lakṣmī-lābhottānita-mukhāni pañkaja-vanāni vinayam...
(*Harṣacarita* 139.9-10)

不動平静な瞳なる眼を俯き加減にして、幸を得んと(望み)面を上げたる蓮の群れを嗜め(て行儀作法 (*vinaya*) を教え)るが如き(彼)

....

(2-2-2) 青二才

(2-2-2-1) *yauvana*

paraspara-viruddhāyor vinaya-yauvanayoś cirāt prathamasaṃgama-cihnam iva bhrū-saṃgatakena kathayantam...
(*Harṣacarita* 139.20)

その二つの眉の交わるは、互に矛盾する礼節 (*vinaya*) と若気 (*yauvana*) の、やっと初めて相い会するを物語る如く...

(2-2-2-2) *abhinava-yauvana*

avinaya-bahulatayā cābhinava-yauvanasya... (*Kādambarī* 270.5)

青二才(生意気盛り)なれば、兎角無礼の多ければ...

(2-2-2-3) *pragalbha*

既述の「生意気」に類するものとして「誇り高き矜持」(*pragalbha*) が

⁴³ Cf. *putra-durnaya* in H.2.51.3b (Bombay).

ある。

rājakula-saṃvāsa-pragalbhayāpy anujjhita-vinayayākanyayā
(*Kādambarī* 192.5)

王家にあれば、その持する誇りも殊のほか高けれど、さりとして（慎ま
しやかに）礼を失する事なき (*anujjhita-vinaya*) 少女...

(2-2-3) 「青二才」の概念に類似したものとして王族武士階級の「勇猛」
があるので、ここに便宜上一括して論じる事とする。vinaya は就中おと
なしいバラモンの美德とされたから、それはしばしば「勇猛果敢」等武士
の特性と対蹠される。

(2-2-3-1) *vīra*

理想的男性を描く「気は優しくて力持ち」に類する表現に言われる。

vīreṇāpi vinayavatā, priyaṃvadenāpi satyavādinādinābhirūpeṇāpi
svadāra-saṃtuṣṭena (*Kādambarī* 101.5)

勇猛なるも礼節あり、言葉優しくも忠告なし、美貌なるも己が妻のみ
に満足なし...

(2-2-3-2) *vikrama*

Śūdraka 王の青年期を描く *Kādambarī* の序章に言う。

kesarī-kīśorakair iva vikramaika-rasair api vinaya-vyavahāribhir
ātmanah pratibimbair iva rāja-putraiḥ saha ramamāṇaḥ
prathame vayasī sukham aticiram uvāsa (*Kādambarī* 13.2-3)

若獅子の如く勇猛心を唯一真髓としながら、その振舞いたるや、殊の
外礼節を貴ぶ、己を映すが如き王子達と共に、久しく彼は愉しく幸せ
に青年期を過ごした。

(2-2-3-3) *lakṣmī*

理想的な男女の結婚は *lakṣmī* と *vinaya* の相和する如しと言われる。

両者は時に相克する⁴⁴文武、聖俗夫々の理想的象徴であった。

Madanalekhā と *Aśokadatta* の結婚を謳って次の如く言われる。

⁴⁴ Cf. Hara, *śāstra* versus *śāstra*, Gedenkschrift, J. W. de Jong.

*tayoś ca so 'bhūd rājendra-putrī-viprendra-putrayoḥ
saṃgamo 'nyonya-śobhāyai lakṣmī-vinayayor iva (KSS.25.171)*
卓れた王家の娘と卓れたバラモンの息子との結婚は栄光と謙讓の合体
の如く、互に光輝あらしめた。

(2-3) 「訓練」

動物の「調教」や青二才の「陶冶」は更に進んで「訓練」に発達する。
猿王 Sugrīva は Lakṣmaṇa に請合って言う。

*diśaḥ prasthāpitāḥ sarve vinītā haraya mayā
sarveśāṃ ca kṛtaḥ kālo māsenāgamanam punaḥ (MBh.3.266.17)*
四方に派遣された者は皆、私が訓練した猿達で、然も皆一月以内に帰っ
てくるよう期限を決めてあります。

「訓練」の内容は更に細分化される。

(2-3-1) 武術

(2-3-1-1) 王子の日課を述べて Kauṭilya は言う。

*pūrvam ahar-bhāgam hasty-aśva-ratha-praharaṇa-vidyāsu
vinayaṃ gacchet (KAS.1.5.12)*
昼の前半は、象、馬、戦車、武器の術に関する訓練を受けるべきであ
る。⁴⁵

(2-3-1-2) Saṃjaya より Bhīṣma の訃を聞き Dhṛtarāṣṭra は述懐する。

*sarvāstra-vinayopetaṃ dāntaṃ śāntaṃ manasvinam
hataṃ śāntanavaṃ śrutvā manye śeṣaṃ balaṃ hatam
(MBh.6.15.41)*

一切の武器に訓練を積み（武術の奥義を究め）、温順、静穏、賢明な
る Śāntanu の子の戦死を耳にすれば、余は既に全軍悉く壊滅せるも
のと思案す。⁴⁶

⁴⁵ Cf. *praharaṇa-vidyā-vinītaṃ tu kṣatriya-balaṃ śreyah (KAS.9.2.24)* .

⁴⁶

tuṣyāmi te vipra-mukhya bhuja-vīryasya saṃyuge

(2-3-2) 技芸

有名な Marīci 仙の物語に在って遊女の教育の一環に次の如く言われる。

*nṛtya-gīta-vādiya-nāṭya-citrāsvādyā-gandha-puṣpakalāsu lipijñā-
na-vacas-kauśalādiṣu ca saṃyag-vinayanam*

(*Daśakumāracarita* 81.2-3)

踊り、歌、器楽、演劇、絵画、料理、香料、活花の各種技芸や、或いは書法、話法の嗜みについての正しい訓練 (田中於菟弥訳)⁴⁷

(2-3-3) 学習

(2-3-3-1) 聖女 Sulabhā は己が生涯を述べて言う。

*sāhaṃ tasmin kule jātā bhartary asati mad-vidhe
vinītā mokṣa-dharmeṣu carāmy ekā muni-vratam*

(*MBh.*12.308.184)

妾はこの家門に生を享け、似合いの夫を得ぬまま、解脱法を究め、独り聖仙の生活信条を踏み行く。⁴⁸

*aviśādasya caivāsya śāstrāstra-vinayasya (MBh.1.181.15)
viśeṣārthī tato bhīṣmaḥ pauṭrāṇaṃ vinayepsayā
iṣu-astra-jñān paryapṛcchad ācāryān vīrya-saṃmatān (I)
nālpa-dhīr nāmahābhāgas tathā-nānāstra-kovidaḥ
nādeva-sattvo vinayet kurūn astre mahā-balān (MBh.1.121.2)
gadāsi-carma-grahaṇeṣu śūrān astreṣu śikṣāsu rathāśva-yāne
saṃyag vinetā vinayaty atandrīs tāṃś cābhimanyuḥ satataṃ kumāraḥ
(MBh.3.180.28)*

⁴⁷ Cf.

*sā rājā-hamsair iva saṃnatāngī gateṣu līlañcita-vikrameṣu
vyañiyata pratyupadeśa-lubdhair āditsubhir nūpura-siñjitāni
(Kumāra-saṃbhava 1.34)*

⁴⁸ Cf.

*etān gṛhasthān nṛpatīn avehi naiḥśreyase dharma-vidhau vinītān
ubhau 'pi tasmād yugapad bhajasva vittādhipatyam nṛpa-śriyaṃ ca
(Buddhacarita 9.21)*

(2-3-3-2) 「学習」の結果、人は一芸に秀で、学に通曉する様になる。Rāma を評し Hanumān は言う。

*rāja-vidyā-vinītaś ca brāhmaṇānām upāsitā
śrutavāñ śīla-sampanno vinītaś ca paraṃtapaḥ (13)
yajur-veda-vinītaś ca vedavidbhiḥ supūjitaḥ
dhanur-vede ca vede ca vedāṅgeṣu ca niṣṭhitaḥ (R.5.33.14)*

彼は帝王学精通し、バラモンを敬い、学あり、氣立て善く躰け善く、敵を悩ます。

Yajurveda に精通し、Veda 学者の尊敬を受け、弓術、Veda, Veda の補助学にも通曉す。⁴⁹

王たる者の心得を謳ってYSは言う。

*sva-randhra-goptā "nvīkṣikyāṃ daṇḍa-nītyāṃ tathaiva ca
vinītaś tv tha vārtāyāṃ trayyāṃ caiva narādhipaḥ (YS.1.311)*

王は自分の弱点を庇い、哲学、⁵⁰ 司法、経済学と三ヴェーダ学を修めて（それらに通曉し）。

(2-3-3-3) *abhivinīta*

abhivinīta の語も「通曉」の義に取り得る。Rāvaṇa の叔父 Mālyavat は Rāma を讃えて甥に忠告して言う。

*vidyāsv abhivinīto yo rājā rājan nayānugaḥ
sa śāsti ciram aiśvaryaṃ arīṃś ca kurute vaśe (R.6.26.6)*

かの王は諸学に通じ、⁵¹ 政策にも長け、敵を制して久しく一国の長た

*atha bhājanī-kṛtam avekṣya manuḥ-patim ṛddhi-sampadā
paura-janam api ca tat-pravaṇaṃ nijagāda dharmā-vinayaṃ vināyakaḥ
(Saundarananda 3.26)*

⁴⁹ Cf. R.4.5.10 (*dharmā-vinīta*), 5.50.8 (*dharmārtha-vinīta-buddhi*)

⁵⁰ For *ānvīkṣikī*, cf. P.Hacker (演繹的研究法)。

⁵¹ 但し、ここの *vidyā* は「学」のみならず「術」(武術その他)をも意味するであろう (cf. *praharaṇa-vidyā* above)。尚、*vidyā-vinaya* の合成語は *vidyā-vinaya-hetur indriya-jayaḥ kāma-krodha-lobha-māna-mada-harṣa-tyāgāt kāryaḥ* (KAS.1.6.1, cf. 15.1.16) にも見える。

り。⁵²

(2-4) 「教育」

「訓練」は「教育」に通じ、ここに *vinetr-* は「導師」となる。

(2-4-1) 理想王 Dilīpa を描いて、

*prajānām vinayādhānād rakṣaṇād bharaṇād api
sa pitā pitaras tāsām kevalam janma-hetavaḥ (Raghuvamśa 1.24)*
臣民に躰を植付ける事、⁵³ 彼等の守護、扶養の故に、彼は彼等の父と
仰がれた。(彼等の産みの) 父は唯誕生の因たるのみ。

ここに Mallinātha は *vinaya* を *śikṣā* と釈している。

Rāma 兄弟の成長を描写して言われる。

*svābhāvikaṃ vinītatvaṃ teṣām vinaya-karmaṇā
mumūrcha saha jaṃ tejo haviṣeva havir-bhujām
(Raghuvamśa 10.79)*

彼等(四王子)の先天的な慎ましさ (*vinītatva*) は(後天的な)教育 (*vinaya*) の業により⁵⁴更に堅固なものとなった。⁵⁵ 恰も火の本来の輝きが供物によって増大する⁵⁶様に。

ここでも Mallinātha は *vinaya-karmaṇ* を *śikṣā* と釈している。

人間、就中王にしてこの種の教育を欠く時、それは大なる弊害を齎す。

*avidyāvinayaḥ puruṣa-vyāsana-hetuḥ (I) avinīto hi vyāsana-
doṣān na paśyati (KAS.8.3.2)*

学に昧き (*a-vidyā-vinaya*) は人間破滅の因。蓋し教育無き者 (*avinīta*) は破滅の過失を見ざればなり。

⁵² Cf. R.2.1.18 (*vṛddhair abhivinītas ca dvijair dharmārtha-darśibhiḥ*)

⁵³ この *vinaya-ādhāna* には *garbha-ādhāna* の連想があるであろう。For *vinaya-ādhāna*, cf. also MBh.13.98.5.

⁵⁴ Mallinātha: (*nisarga-saṃskāra-vinīta.*) For this *nisarga-saṃskāra-vinīta*, cf. also Raghuvamśa 3.35c.

⁵⁵ For *mumūrcha*, cf. Hara 2000 (1).

⁵⁶ Cf. Mallinātha: (*mumūrcha=vavṛdhe*).

(2-4-2) 教育は後天的訓練を予想するから、*vināyika* は *svaja* (生得、先天的) と対蹠される。Rāma は弟 Bharata を励まして言う。

*āgatā tvām iyaṃ buddhiḥ svajā vaināyikī ca yā
bhṛśam utsahate tāta rakṣitum pṛthivīm api (R.2.104.16)*

生得と将又(後天的な)教育訓練による頭の良さを汝は具えている。
汝は十分に大地を統べる事が出来る。

(2-4-3) 結果的にそれは *upadiś-*(教示)の対格に立った。Bāṇa は Harṣa 王の寛仁に感激し述懐して言う。

*upadiśanti hi vinayam nurūpa-pratirūpa-pratipatty-
upāpadanena vācā vināpi bhartavyānām svāmīnaḥ (Harṣacarita
81.19-20)*

言葉に出さずとも主は、類似の事象にこと寄せて、それとなく家来に
躰を教示し給う。⁵⁷

(2-4-4) 但し、躰けられなくても生まれつき従順にして行儀よい者もある。Rāma を型取る句に *svabhāva-vinīta* の合成語が見えるが、この場合この *vinaya* の語は「陶冶」「教育」より「行儀のよさ」を意味し、次節の「礼節」に関している。

*mātaraṃ rāghavaḥ kiñcit prasāryāñjalim abravīt
sa svabhāva-vinītaś ca gauravāc ca tadānataḥ (R.2.17.13).*

母にラーマはちょっと合掌して言った。生れつき行儀よい彼は敬意を
籠めて身をかがめて。

同様に *sahaja vinaya* の表現も見える。両親に瓜二つの Lava を見て驚き、Janaka は述懐する。

⁵⁷ 次下の章句に在って *vinaya* は諸々の徳の依所とされる。

*vinayaṃ guṇā iva vivekam apanaya-bhidaṃ nayā iva
nyāyam avadhaya ivāśaraṇaḥ śaraṇaṃ yayuḥ śivam atho maharṣayaḥ
(Kirātārjunīya 12.17)*

Mallinātha は *vinaya= śikṣā* とし、C. Cappeller も *Lehre* と独訳している。

*vatsāyās ca raghūdvahasya ca śīśav asminn abhivyaṅyate
saṃvṛtṭiḥ pratibimbiteva nikhilā saivākṛtiḥ sā dyutiḥ
sā vāṇī vinayaḥ sa eva sahaḥ puṇyānubhāvo 'py asau
hā hā devi kim utpathair mama manaḥ pāriplavaṃ dhāvati
(Uttararāmacarita 4.22)*

容姿といい、威光といい、声といい、生れ付きの行儀のよさといい、立派な品位といい、愛娘とラグの後裔の結晶する所、凡てこの子に反映して顕現している様だ。嗚呼、当てもなく、我が心は動揺する。

(2-5) 「礼節」

「陶冶」は「躰け」となり、「礼節」に通ずる。斯くて聖者に拝謁する際には、それに適う礼を心して、王者と雖も馬を降り、徒歩で伺候する事となる。Harṣa 王が仏僧 Divākaramitra をその庵に訪ねるに当り、

*avatūrya ca giri-sariti samupaspr̥śya.... avalambya ca tapasvi-
janadarśanocitaṃ vinayaṃ hṛdayena...viralair eva rājabhir
anugamyamānaś caraṇābhyām prāvartata gantum (Harṣacarita
236.8-12)*

(馬を) 降りてから溪流に口を漱ぎ、聖者拝謁に相応しき礼 (vinaya) を心に抱き、少数の函簿を従えて徒歩にて出発した。

「陶冶」の結果「礼節を知る」者は「躰のよい」「行儀のよい」「礼儀正しい」者となる道理である。

(2-5-1) 以下に先ずこの語が合成語の前分に立つ文脈を検討するであろう。

(2-5-1-1) *vinaya-saṃpanna*

*tasyaṃ cotpādayām āsa viduraḥ kuru-nandanaḥ
putrān vinaya-saṃpannān ātmānaḥ sadṛśān guṇaiḥ
(MBh.1.106.14)*

Kuru の後裔 Vidura は彼女との間に、徳高きこと彼に等しく、よく躰られた息子達を儲けた。⁵⁸

(2-5-1-2) *vinayānvita*

sa mokṣam anucintyaiva śukaḥ pitaram abhyagāt

prāhābhivādya ca gurum śreyorthī vinayānvitāḥ (MBh.12.312.1)
 Śuka は解脱を心に思った時、直ちに父の許に赴き、安寧を欲し礼儀
 正しき彼は尊父に挨拶して曰く。⁵⁹

(2-5-1-3) *vinayopeta*

tataḥ sa punar evātha mārkaṇḍeyaṃ yaśasvinam
papraccha vinayopeto dharmarājo yudhiṣṭhiraḥ (MBh.3.186.1)
 さて、かの礼儀正しい法の王 Yudhiṣṭhira は、令名高き Mārkaṇḍeya
 に訊ねて曰く。⁶⁰

(2-5-2) 合成語の前分 (*vinaya-*) に立つ用例と同じ雰囲気は、それが
 奪格 (*vinayāt*) 乃至具格 (*vinayena*) と連合する文脈にも窺い知られる。
 結果的にそれらは「敬礼」「挨拶」等、礼節、恭順の動作と連合する事と
 なる。以下にそれらの用例を見るであろう。

(2-5-2-1) 形容詞、名詞連合

「屈身」

⁵⁸ Cf.

kaccid vinaya-saṃpannaḥ kula-putro bahu-śrutaḥ
anasūyur anupraṣṭā sat-kṛtas te purohitaḥ (MBh.2.5.29)
vidyā-vinaya-saṃpanne brāhmaṇe gavi hastini
śuni caiva śvapāke ca paṇḍitāḥ samadarśinaḥ (MBh.6.27.17)
buddhyā vinaya-saṃpannā sarva-jñāna-viśāradā
sasmitaṃ bahu-buddhyāḍhyā gaṅgā vacanam abravīt (MBh.13.134.24)

Cf. also R.1.1.23, 2.94.7.

⁵⁹

tato yudhiṣṭhiro rājā bhūyaḥ śāntanavaṃ nṛpa
go-dhānū vistaram dhīmān papraccha vinayānvitāḥ (MBh.13.76.1)

Cf. also R.1.51.10, 2.1.37, 4.42.32, 5.36.4.

⁶⁰ Cf.

praśritā vinayopetā dama-nityāḥ susaṃśitāḥ
prayānti sthānam ajaraṃ sarva-karma-vivarjitāḥ (MBh.12.285.38)
taṃ praṇamya mahātmānaṃ sukhāsīnaṃ maharṣayaḥ
papracchur vinayopetā niḥśreyasam idaṃ param (MBh.14.35.18)

Cf. R.7.35.1.

ānata

*te drṣṭvā dharma-rājānaṃ devarṣiṃ cāpi lomaśam
nakulaṃ sahadevaṃ ca tathānyān brāhmaṇoṣabhān
vinayenānatāḥ sarve praṇipetuś ca bhārata (MBh.3.153.30)*

彼等一同は法の王、及び神仙 Lomaśa, (弟) Nakula, Sahadeva、その他諸々のバラモンの雄を見て、恭しく頭を垂れ (*vinayenānata*)、
彼等の前に平伏 (*praṇi-pat-*) した。⁶¹

avanata

*tam āgatam ṛṣiṃ drṣṭvā nāradaṃ sarva-dharma-vit
sahasā pāṇḍava-śreṣṭhaḥ pratyutthāyānujaiḥ saha
abhivādayata prītyā vinayāvanatas tadā (MBh.2.5.4)*

訪ねて来たかの聖仙 Nārada を見るや、人の道をよく弁えた Pāṇḍu
の長男は弟達と共に直ちに起立して (*praty-ut-sthā-*) 迎え、好意を
籠めて恭しく頭を垂れて (*vinayānata*) 挨拶 (*abhivādaya-*) した。⁶²

praṇata

*sa drṣṭvā parama-prīto viśvāmitro mahā-balaḥ
praṇato vinayād viro vasiṣṭhaṃ japatām varam (R.1.51.1)*

大力無双なる勇者 Viśvāmitra は、祈祷者の長 Vasiṣṭha に見えて大
いに喜び、恭しく頭を垂れた。⁶³

⁶¹ Cf.

*tam utpatantaṃ jagrāha keśavo vinayānataḥ
bābubhyāṃ pīna-vṛttābhyāṃ prayatnād balavad balī (MBh.9.59.9)
cara vinaya-vratam ānatānanaḥ (Harṣacarita 78.11)*

⁶² Cf.

*sābhivadya tapo-vṛddhān vinayāvanatā sthitā
svāgatam ta iti proktā taiḥ sarvais tāpasaiś ca sā (MBh.3.61.64)
vinayāvanata-pūrva-kāya (Kādambarī 466.4)*

尚、形容詞 *avanamra* との連合 (*vinayāvanamra*) は Kādambarī 501.11-12, Harṣacarita 158.2 に見える。

⁶³ その動詞形もこの語と連合する。

candrāpīḍas tu..tām ..darśita-vinayaḥ praṇamāma (Kādambarī 387.9)

「合掌」

*añjali**so 'bhigamya mahātmānaṃ pitaraṃ satya-vikramam**abhivādayad vyagro vinayena kṛtāñjaliḥ**irāvān asmi bhadraṃ te putras̄ cāhaṃ tavābhibho (MBh.6.86.11)*

彼は偉大にして真に勇猛なる父に近づき、心籠めて恭しく合掌なし
(*vinayena kṛtāñjali*) て挨拶 (*abhivādaya-*) せり。「拙者は Irāvāt,
卿の息なり」と。⁶⁴

*prāñjali**aprechata tato rāmo dakṣiṇāsālayaṃ munim**prāñjalir vinayopeta idam āha vaco 'rthavat (R.7.35.1)*

Rāma は南方に拠る聖仙に慎ましく合掌なして訊ね、意味深長な言な
して曰く。⁶⁵

「随従」

*anuvartin**sampūjyamānas taiḥ prahvair vinayād anuvartibhiḥ**tad-vaśa-sthāyibhiḥ śiṣyair lolair mana ivendriyaiḥ**(Buddhacarita 12.93)*

彼等は彼の意思通りにこまめに動く弟子の様に慎しく (*prahva*) 彼
に侍き奉仕していたが、その様はその支配下にある不安定な (五) 官
が心に侍く如くであった。

*ko nu ayaṃ yo bhagavatā praṇamya vinayād vibho**vāgbhiḥ stuto varīṣṭhābhiḥ śrotum icchāma taṃ vayam (MBh.6.62.4)*⁶⁴ Cf.*vinayenāñjalim kṛtvā prayatnenopagamya ca**dr̥ṣṭo mayā sa bhūtātmā devaḥ kamala-locanaḥ (MBh.3.186.1)*⁶⁵ Cf.*sa śaṅkhaḥ prāñjalir bhūtvā vinayād avaniṃ gataḥ (H.86.57ab)*

(2-5-2-2) 動詞連合

「近侍」「伺候」

*abhigam-**tatas te pāṇḍavā dūrāvātūrya padātayaḥ**abhijagmur nara-pater āśramam vinayānatāḥ (MBh.15.31.1)*

彼等 Pāṇḍu の子等は遠方より (車を) 降りて、徒歩にて王の庵に向かい恭しく頭を垂れた。⁶⁶

*upagam-**śoka-saṃmūḍha-hṛdayo nīsā-kāle sma kauravaḥ**pitāmahaṃ mahā-prājñam vinayenopagamya ha**yad abravīt sutas te 'sau tan me śṛṇu janeśvara (MBh.6.61.25)*

汝の息子、Kuru の後裔 (Duryodhana) が、夜半悲しみに心もそぞろ、大智者なる祖父 (Bhīṣma) に恭しく近づいて語りし所を、我より聞け。

*upasaṃgam-**putras tava mahārāja madra-rājam idaṃ vacaḥ**vinayenopasaṃgamya praṇayād vākyaṃ abravīt (MBh.8.23.1)*

大王よ、汝の息子はマドラの王に恭しく近づき、親しげに次の如く語った。

「起立」

*abhyutsthā-**mām iyam abhyuttiṣṭhati devī vinayād upasthitā priyayā**(Mālavikāgnimitra 5.6ab)*

それがし迎えて あれに正妃は 品良く起立し給うぞ、愛しき姫に侍かれつつ (大地原豊)

pratyutsthā- 上記 (9-2-1) MBh.3.153.30参照。⁶⁶ Cf.*tathā citrānadā devī kauravyāsyatmajāpi ca**prṥhāṃ kṛṣṇāṃ ca sahite vināyenābhijagmatuḥ**subharām ca yathā-nyāyam yās cānyāḥ kuru-yoṣitaḥ (MBh.14.90.2)*

「近伺」

upasthā-

*tathaiva sa mahīpālah kṛṣṇaṃ cakra-gadā-dharam
pradyumna iva govindaṃ vinayenopatasthivān (MBh.14.90.8)*

かの王 (Babhruvāhana) が、車輪と棍棒を手にする Kṛṣṇa に恭しく近づくと Pradyumna の Govinda に為せるが如くであった。

upās-

*athāśramastho vinayāt kadācit taṃ mahāmunim
upāsīnaḥ sa kākutsthaḥ sutīkṣṇam idam abravīt (R.3.10.28)*

さて或る時、庵に在った Kākutstha は大仙 Sutīkṣṇa に恭しく侍りながら、次の様に言った。

「挨拶」「敬礼」

abhivad-

*tasmin mahati saṃkrande rājā duryodhanas tadā
gāṅgeyam upasaṃgamya vinayenābhivādya ca (MBh.6.91.1)*

この激戦が終わった時、Duryodhana 王は Bhīṣma に近づき、恭しく挨拶して⁶⁷

vand-

*śatrughnaś ca tadā rāmam abhivādya salakṣmaṇam
sītāyās caraṇau paścād vavande vinayānvitaḥ (R.6.115.37)*

その時、Śatrughna は Lakṣmāṇa と共なる Rāma に挨拶し、次いで Sītā の両足に丁寧に敬礼した。⁶⁸

⁶⁷ Cf.

*yudhiṣṭhiraṃ ca rājānaṃ bhīmādīṃś cāpi pāṇḍavān
upagama mahā-tejā vinayenābhyavādayat (MBh.14.90.6)*

Cf. also MBh.6.86.11, R.7.50.4 and Veṅīsaṃhāra 6.34a: (*tam vatsalām anabhivādya vinītaṃ ambām*)

⁶⁸ Cf.

*tataḥ sāmḍipinaṃ pūrvam upagama janārdanaḥ
vavande vṛṣṇi-nṛpatim āhukam vinayānvitaḥ (H.95.9)*

abhipūj-

*taṃ prīyamāṇaṃ kṛṣṇas tu vinayenābhipūjayat
bhīmaṃ ca puruṣa-vyāghraṃ vidhivat pratyapūjayat
(MBh.1.213.37)*

一方 Kṛṣṇa は満足せる彼に恭しく敬意を表し、次いで人中の虎、
Bhīma に儀規に従い挨拶した。

abhyarc-

*abhigamyā sa rājānaṃ vinayena samāhitaḥ
abhyarcya brāhmaṇān pārtho draupadīm abhijagmivān
(MBh.1.213.14)*

Prthā の息子 (Arjuna) は (Yudhiṣṭhira) 王に近づき、心を籠め
て恭しくバラモン達に敬礼して Draupadī の許に赴いた。

「平伏」

praṇipat- MBh.3.153.30参照。

(2-6) 以上我々は五節に亘ってこの語が「有情」一般を対象とする用例を見た。それは野生動物を対象とする時「調教」となり、動物に類する幼児や生意気盛んな青二才を対象とする時「陶冶」となり、若者一般を対象とする時後天的「訓練」、「教育」となり、それが更に人格形成の語となって「礼節」となった。ここに「調教」より始まって「陶冶」、「訓練」、「人格形成」と発展して行く過程の間に、我々は仏典の「律」への近接を見る如くである。次に章を改めて別の観点よりこの語の意味合いを見て行くであろう。

III

前二章に亘り我々は *vinaya* の語を、この語の現れる文脈の性格によって整理し検討したが、次に四節に亘ってその否定形や反対の概念と比較する事によって語感の一端を浮彫りにして見たいと考える。

(3-1) *a-vinaya*

先に *vinaya* の語が「幼児期」「青二才」と連合している用例を見たが、その否定形 *a-vinaya* は「悪戯」「不躑」「生意気」「無礼」等に通じている。

(3-1-1) 輪廻転生物語にあって、もと天界の住人であった者が今生に地上に生を享けてあるのは、前世の「不躑」「無礼」な行為の結果であったとされる。今際の際の *Kabandha* は *Rāma* に己が過去物語をする。

*virūpaṃ yac ca me rūpaṃ prāptaṃ hy avinayād yathā
tan me śrṇu naravyāghra tattvataḥ śaṃsatas tava (R.3.66.15)*

私が悪戯 (*avinaya*) の故に、この醜い姿になってしまった経緯を審らかにお話し致します。お聞きください。

彼は聖仙 *Sthūlasīras* を脅してその呪いを蒙っていたのであったが、梵文学にはこの種の前世物語が繰返される。

*tad yaḥ sa kāmopahata-cetāḥ svayaṃkṛtād evāvinayād divya-
lokataḥ paribhraśyan martya-loke vaiśampāyana-nāmā śukanāsa-
sūnur abhavat (Kādambārī 578.8-9)*

これは実に、彼が愛欲に心迷い、自ら為せる無礼な行為によって天国より落ち、人間界に *Vaiśampāyana* という名前で *Śukanāsa* の息子として生れたのであった。⁶⁹

この様に必ずしも悪意でなくとも、不注意な「悪ふざけ」が長上や仙人の怒りを買う事があるが、この類の「無礼」がこの語によって示される。

(3-1-2) のみならず自制なき「不羈奔放」「我儘勝手」もこの語の意味範囲に入っていた。これまで王の権威を借りて勝手な事をしてきた *Śakāra* は最後に捕らえられる。

*(nepathye) are re rāṣṭriya-śyālaka! ehy ehi/svasyāvinayasya
phalam anubhava*

(Mṛcchakaṭīka 19.51 prose, NSP 289.14)

⁶⁹ For *svayaṃkṛta vinaya*, cf. also 578.9-10 (*sa evaiṣa punaḥ svayaṃkṛtenāvinayena kopitasya pitur ākrośāt...*)

(樂屋で) おお、王の義兄よ、こっちへ来い。自業自得、(これまでの) 我侂勝手 (な行為) の果報を受けよ。⁷⁰

(3-1-3) 時にそれは擬人的に用いられる事もある。女性は涙の口実にしばしば花粉を持ち出す。

Vāsavadattā: eṣā khu madhuarāṇam aviṇādo kāsa-kusuma-reṇuṇā paḍideṇa sodā me diṭṭhī (Svapnavāsavadatā 4.4 prose)

蜜蜂達の悪戯より、偶々 Kāśa の花粉が眼に入って、私は涙を流すのみ。

(3-1-4) 次下の章句にあって *vyasana* の正確な語義 (不幸、災難、不品行) を確定し得ないが、それは「一切の災難を呼び込むもの」(*sarva-vyasana-bandhu*) と言われる。既述の *Bāṇa* は *Harṣa* 王を前にして不平を述べて言う。

..deve śāsati..mahīm ka ivāviśaṅkitaḥ sarva-vyasana-bandhor vinayasya manasāpy abhinayaṃ kalpayiṣyati (Harṣacarita 79.16-18)

王様がこの大地を統べ給う間、心の中ですら誰がぬけぬけと、一切不品行の友たる無礼を演じましょうぞ。⁷¹

(3-1-5) 同様に *a-vinīta* なる形容詞は「躰のない」「甘やかされた」の義となる。盲愛、溺愛を非難する烈女 *Vidurā* は不甲斐なき息子 *Samjaya* に次の様に言ふ。

yo hy evam avinītena ramate putra-napṭṛṇā

anutthānavatā cāpi moghaṃ tasya prajā-phalam (MBh.5.133.9)

斯くの如く、甘やかされた (*avinīta*) 無気力な息子や孫と愉しむ如き人は、子孫を持つも空し。

⁷⁰ 同類の「己が犯せる無礼」の表現は *nijāvinaya-śravaṇa-lajjayā vilīyamāna iva...* (*Kādambarī* 579.7) にも見える。

⁷¹ For *avinīta*, cf. R.6.45.9 *capalā hy avinītās ca cala-cittās ca vānarāḥ*, MBh.4.20.25, 12.94.2, 12.276.54.

尚、Śakuntalā の最終幕で Sarvadamana をたしなめる庵の一婦人は彼を *aviṇḍa* (7.14.3) と呼び、辻博士はこれを「いたずらっこさん」と邦訳している。⁷²

(3-2) *dur-vinīta*

(3-2-1) それが息子に冠せられる時「どら息子」の義となる。悪魔 Madhu は息子 Lavana に手を焼いた。

*taṃ putraṃ durvinītaṃ tu dr̥ṣṭvā duḥkha-samanvitaḥ
madhuḥ sa śokam āpede na cainaṃ kiṃcid abravīt (R.7.53.18)*

嫉の悪いどら息子を見て Madhu は苦しみ心を痛めたが、彼には一言も言わなかった。⁷³

(3-2-2) その女性形は「不貞女」の義と成る。心ならずも帝釈天と交わった妻 Ahalyā を呪う Gautama の言。

durvinīte vinidhvamsa mamāśrama-samīpataḥ (R.7.30.34cd)
「不貞な女よ、我が庵の側より消え失せろ」

(3-2-3) *dur-vinīta* の語は時に「怪しからぬ奴」の義にも用いられる。侮辱された妹 Śūrpanakhā を見て兄の Khara は言う。彼は Rāma を *durvinīta* と呼んだ。

*upalabhya Śanaiḥ saṃjñāṃ taṃ me śaṃsitum arhasi
yena tvam durvinītena vane vikramya nirjitā (R.3.18.9)*

その内に意識を回復したら、森でよくもお前をやった怪しからぬ奴が誰か言ってみろ。⁷⁴

⁷² 尚、*abhūmir iyaṃ avinayasya (7.13.3)* の *avinaya* は “rude behaviour” (Emeneau), “Unart” (Losch) の義で「狼藉」の訳語は少し強過ぎる嫌いがある様である。

⁷³ Cf. MBh.3.238.17, 12.337.36, R.6.74.24, 6.82.37.

⁷⁴ Cf. R.3.21.12 (*durvinītasya rāmasya*)。尚、Tārā の嘆き *sahāyinīm adya vih-āya vira yama-kṣayaṃ gacchasi durvinītam (R.4.20.23)* に見えるこの語を Lefebvre は “discourteously” と副詞に訳しているが、「Yama の国」に繋る貶称的形容詞に取る事は不可能であろうか。

(3-3) *vinaya* と *avinaya*

(3-3-1) *vinaya* と *avinaya* の対蹠は就中王子擁立の文脈に顕著で、それは Nīti 文献に言及される。

vinayopagrahān bhṛtyaiḥ kurvīta nṛpatiḥ sutān

avinīto-kumāraṃ hi kulam āśu vinaśyati (5)

vinītam urasaṃ putraṃ yauva-rājye 'bhiṣecayet (Nīti-sāra 7.6ab)

王たる者は家来に命じて王子達に躰 (*vinaya*) を身につけさせねばならぬ。実に躰無き (*avinīta*) 王子のいる一族は速やかに滅びるから。

よく躰けられた (*vinīta*) 実の息子を皇太子に即位させるべきである。同様に Kauṭilya は言う。

*kāṣṭham iva hi ghuṇa-jagdhamaṃ rāja-kulam avinīta-putram
abhiyukta-mātram bhajyeta (23)*

というのも、どら息子 (*avinīta-putra*) のいる王家は、虫に食われた木材のように、攻撃されるや否や滅亡するであろうから。

na caika-putram avinītaṃ rājye sthāpayet (KAS.1.17.51)

独り息子と雖も、どら息子を王位に即けてはならぬ。

*vinīto rāja-putraḥ kṛcchra-ṛttir asadrṣe karmaṇi niyuktaḥ
pitaram anuvarteta... (KAS.1.18.1)*

よく躰けられ、苦勞した王子は、嫌な仕事に任命されても父に従う事が出来る。⁷⁵

⁷⁵ 又、*vinaya* と *avinaya* の対蹠は同一構文中にも見られる。

avṛttim vinayo hanti hantya narthaṃ parākramaḥ

hanti nityaṃ kṣamā krodham ācāro hantya alakṣaṇaṃ (MBh.5.39.32)

na rājyaṃ prāptaṃ ity eva vartitavyam asāṃprataṃ

śriyaṃ hy avinayo hanti jarā rūpam ivottamam (MBh.5.34.12=IS.3399)

自制 (*vinaya*) は不行跡を、勇敢は不利益を、忍耐は憤怒を、良俗は凶兆を滅す。

王権を手にしたとてゆめ奢るべからず。自制欠けば (*avinaya*) 幸を滅す、老

(3-3-2) *vinīta*, *a-vinīta* と、使役法 *vineti* との連合は Pali 仏典に見える。自ら調教せず、自制心なき者は他を調教する能わずと謂われる。

so vata Cunda attanā adanto avinīto aparinibbuto paraṃ damessati vinessati parinibbāpessatīti n' etaṃ ṭhānaṃ vijjati. so vata Cunda attanā danto vinīto parinibbuto paraṃ damessati vinessati parinibbāpessatīti ṭhānaṃ etaṃ vijjati (MN.1.45.6-10)

Cunda よ、自ら制せず、克己なく、抑せざる者は他をその様になす事、有り得ず。自ら制し、克己し、抑する者にして初めて他をその様になす事、可能なり。

(3-4) *vinaya* (嗜み) と *lajjā* (羞恥)。

(3-4-0) 「貞女の嗜み」の概念 (*sādhvī-vinaya*) は Rāmayaṇa に見える。貞女は二夫に見えず、その「嗜み」として他の男に触れる事を潔しとしない。救出に来た Hanumān に Sītā は夫 Rāma 以外の男に触れないと言ってその申し出を断るが (R.5.35.62, 5.36.4)、彼はそれを称えて次の様に言う。

*yukta-rūpaṃ tvayā devi bhāṣitaṃ śubha-darśane
sadr̥śaṃ strī-svabhāvasya sādhvīnāṃ vinayasya ca (R.5.36.2)*

見目麗しき王妃よ、汝の述べる所はまこと理に適う。女の本性⁷⁶と貞女の嗜みに相応しい。

これに反して「羞恥」(*lajjā*) は、もと良家の子女に本来的であった。箴言に言う。

*asaṃtuṣṭā dvijā naṣṭā saṃtuṣṭās ca mahībhujāḥ
salajjā gaṇikā naṣṭā nirlajjās ca kula-striyaḥ (Hitopadeśa 3.64)*

知足なきバラモン、満足なす王、羞恥ある遊女、羞恥なき淑女は滅す。

(3-4-1) ところで、もと *vinaya* は *dharma* とこの *lajjā* との間に生まれた息子であったと言われる。Kūrma-purāṇa 1.8は Dakṣa 24人の娘を

の美貌を損なう如く。

⁷⁶ 但し、通常「女の本性」(*strī-svabhāva*) の合成語は悪い意味に用いられる。Cf. MBh.13.38.

列挙するが、その中の13人は Dharma の娶る所となった。その間に誕生した息子を順次数え上げる中に次の如く言われる。

*buddhyā bodhaḥ sutas tadavad apramādo vyajāyata
lajjāyā vinayaḥ putro vapuṣo vyavasāyakaḥ*
(*Kūrma-purāṇa* 1.8.23)

悟り (*bodha*) は知性 (*buddhi*) との間に彼の息子として誕生した、同様に不放逸 (*apramāda*) 然り。嗜み (*vinaya*) は羞恥 (*lajjā*) との間の息子、決断は美との子 (?)。⁷⁷

(3-4-2) この様に *vinaya* は *lajjā* の息子と言われるが、この両者の関係を散文 *Kāvya* の白眉 *Bāṇa* の *Kādambarī* より以下に暫し伺う事とする。

母 *lajjā* が撃たれば、息子 *vinaya* も当然同じ運命を辿る。男女の交りに在って、女性は先ず「羞恥」(*lajjā*) を捨て、次いで平常の己が「嗜み」(*vinaya*) を忘れる。愛欲の火は第一に淑女の「羞恥」(*lajjā*) を焼き払い、心臓を焦がす。そして愛の神の矢は女の「嗜み」(*vinaya*) を打ち砕き、その後急所を衝くと言われる。

*prāyeṇa prathamam madanānalo lajjāṃ dahati, tato hṛdayam/
ādau vinayādikaṃ kusumeṣu-śarāḥ khaṇḍayanti paścān marmāṇi*
(*Kādambarī* 409.9-10)

概して愛欲の火は第一に「羞恥」を焼き払い、次いで心臓を焦がす。(愛の神の) 五本の花の矢は、先ず「嗜み」その他をぶち壊し、その後諸々の急所を撃つ。

(3-4-3) 「羞恥」の覆いが無くなった時、愛の神 (*Kāma*) は心に侵入し、一切の「嗜み」を失わしめる (*sarva-avinaya-hetu*)。

*skhalite cetasi tal-lagnā pataty eva lajjā/trapāvaraṇa-śūnye hṛdi
praviśya padaṃ kurvan kena vā nivārito durnivārah sarvāvinaya-
hetuḥ kusuma-dhanvā* (*Kādambarī* 497.6-7)

⁷⁷ Cf.

lajjāyā vinayaḥ putro vyavasāyo vasoḥ sutaḥ (*Liṅga-purāṇa* 70.296)
lajjāyā vinayaḥ putro vyavasāyo vasyoḥ sutaḥ (*Vāyu-purāṇa* 10.36)

心 (*cetas*) が躓くと、それに準じて「羞恥」(*lajjā*) が崩壊する。ひとたび「羞恥」(*trapā*) の覆いが無くなった心の中に足を踏み入れたら、誰がこの払い難く、一切の「嗜み」(*vinaya*) を喪失せしめる、愛の神を払い得ようか。

(3-4-4) 類似の概念列挙中のこの語の用例は、又別の観点からその語感を推知せしめる。良家の子女が市井の女の様に振舞うのを自戒する言辞の一節に次の如く言われる。

yadi tāvad itara-kanyakeva vihāya lajjām, utsrjya dhairyam, avamucya vinayaṃ, acintayitvā janāpavādam, atikramya sadācāram, ullāṅghya śīlam avagaṇayya kulam... svayam upagamya grāhayāmi pāṇim/evaṃ guru-janātikramād adharmo mahān (Kādambarī 297.3)

若し私が一般の乙女の如く「羞恥」(*lajjā*) を捨て、冷静を払い、「嗜み」(*vinaya*) を失い、世人の評判を気にせず、良俗を犯し、慎み (*śīla*) を破り、家柄を考えず...自分から近付いて (彼の) 手を握ったならば、目上の人の禁を越え、大きな不道德 (*adharma*) を犯す事となろう。

恋に悩む良家の子女 Kādambarī の嘆き、自己反省に我々はこの *lajjā* と *vinaya* の微妙な絡まりを見る。

“capale, kim idam ārabdham” iti nigṛhīteva lajjayā, “gandharvarāja-putri, katham etad yuktam” ity upālabdheva vinayena, “ayam asāv avyutpanno bāla-bhāvaḥ kva gataḥ” ity upahasite mugdhatayā, “svairiṇi, mā kuru yatheṣṭam ekākiny avinayam” ity āmantriteva kumārabhāvena, “bhīru, nāyaṃ kulakanyakānāṃ kramah” iti garviteva mahattvena, “durvinīte, rakṣāvinayam” iti tarjītevācāreṇa, “mūḍhe, madanena laghutām nītāsi” ity anuśāsītevābhijātyena, “kutas taveyaṃ tarala-hṛdayatā” iti dhikkṛteva dhairyeṇa, “svacchanda-cāriṇi, apramāṇīkṛtāhaṃ tvayā” iti nindīteva kulasthityātigurvīm lajjām uvāha (Kādambarī 354.11-355.4)

彼女は、「軽はずみな女よ、一体何を仕出かしたというの」と羞恥 (*lajjā*) に襲われた如く、「Gandharva の王女よ、これはして良い事か」と自制 (*vinaya*) に譴責された如く、「あの初心な子供らしさは何処へ行ってしまったの」と純真性にかからかわれた如く、「放縦な女よ、独りで好きな様に勝手な事 (*avinaya*) をしてはならぬ」と童貞処女性 (*kumāra-bhāva*) から話し掛けられた如く、「怖れを知る女よ、これは良家の娘のする事ではない」と高尚性に咎められた如く、「行儀悪い女よ (*durvinītā*)、無作法 (*avinaya*) を警戒せよ」と良俗 (*ācāra*) より叱られた如く、「愚かな女よ、愛故に汝は軽はずみな事をした」と御家柄の善さ (*ābhijātya*) により窘められた如く、「貴女のこの浮ついた心は一体何処から来たのか」と重厚さ (*dhairyā*) に慨嘆された如く、「気促な女よ、私は貴女によってすっかり駄目にされてしまったわ」と良家の掟 (*kula-sthiti*) に非難された如くに、彼女はすっかり恥しく (*lajjā*) なってしまった。⁷⁸

上の章句に知られる様に、淑女の品位はその自制や嗜みによって保たれる。併し一旦恋心 (*madana*) が芽生えると、恋は羞恥心 (*lajjā*) を払い、彼女に淑女の嗜み (*vinaya*) を忘れさせる。自制の籜が弛み、更にそれが外れる時、女は恋に身を任せて大胆になる道理であるが、淑女はそれをはしたない事と反省し、自らをふしだらな女と責めた。

(3-4-5) 上記 Kādambarī に見えた「嗜みを失い (=嗜みの籜を外し)」*avamucya vinayam* (296.11) に類似した表現として *śīthilaya-* (弛緩) の動詞と連合する例が同じ作者の作品に見える。但しここでは嗜みを失わせるものは「恋」ではなく「悲哀」であった。夫と息子を喪った Rājyaśrī は常日頃の淑やかさを捨て、思い切って兄 Harṣa に己が決意の程を語り、出家を申し出る。

iyam hi śucām asahyatām vyāpārayanti hatadaiva-dattā ca daśā

⁷⁸ Cf. Kirātārjunīya 10.56-57. そこには淑女とそうでない者が対蹠されている (*agaṇṭa-guru-māna-lajjāyā* [56] *savinayam parābhisṛtya* [57])。

śīthilayati vinayam (Harsacarita 252-253)

過酷な運命が(私に)与えた今の状況は、苦の耐え得ぬ事を開示しつつ、(私の平生の)自制心(=[女の]嗜み)を弛めます。

(3-4-6) 上記は良家の子女の場合であるが、堪忍袋の緒が切れたり、又恋に狂った男も同じ様な状況に陥るであろう。「殿の御乱心」は自制心 *vinaya* の籬の外れた *avinaya* の状態に他ならない。人に長たる者がこの種の自制心を堅持する事の重要性は、帝王学の書に繰返し説かれる所である。王たる者は常に弥が上にも克己を心せねばならない。

*tebhyo 'dhigacched vinayaṃ vinītātmāpi nityaśaḥ
vinītātmā hi nṛpatir na vinaśyati karhicit (MS.7.39)*

既に自ら自制心あり (*vinītātman*)⁷⁹ と雖も、王は常に彼等(清廉潔白なる長老善智識)より克己の道 (*vinaya*) を学ぶべし。⁸⁰ 克己心ある (*vinītātman*) 王の身を滅ぼす事なければなり。⁸¹

のみならず王たる者は、内に残忍でも表面は慎ましく取締うべきと言われる。Bharadvāja と Śatruṃtapa との対話に王の心得が述べられる。

*vān-mātrena vinītaḥ syādd hrdayena yathā kṣuraḥ
ślakṣṇa-pūrvābhībhāṣī ca kāma-krodhau vivarjayet
(MBh.12.138.13)*

心の中は剃刀の如くであっても、(外見の)言葉だけは慎ましくし、優しく語り掛け、愛欲と怒りを制すべし。

Manu は更に自制心無き (*avinayāt*) 王⁸²の破滅と、克己心ある (*vinayāt*)

⁷⁹ Kullūka は *sahaja-prajñayā artha-śāstrādi-jñānena* と釈している。

⁸⁰ *nityaś ca vidyā-vṛddha-saṃyogo vinaya-vṛddhy-artham, tan-mūlatvād vinayasya (KAS.1.5.11)*

⁸¹ Cf. YS.1.309.

⁸²

*evaṃ-vṛtto 'vinītātmā vitathābhīniveśavān
karmaṇā dveṣa-mohābhīyām icchayā caiva badhyate (YS.3.155)*

王の繁栄を謳っている。⁸³ 率先垂範、彼は臣下をも克己の道に就かしめる。

*vidyā-viñto rājā hi prajānām vinaye rataḥ
ananyām pṛthivīm bhūñkte sarva-bhūta-hite rataḥ (KAS.1.5.17)*

蓋し自ら文武の道 (*vidyā*) に陶冶された王は、臣下の陶冶にも心掛け、一切生類の益に心掛ければ、無双の大地を享受する。⁸⁴

(3-4-7) *vinīta-ātman* は自己陶冶の結果、恥を知り、自制心克己心のある人格を指す。その意味で *vinaya* は人格形成の原動力、礼節を知る人間の品位を保つ所以ともなった。

IV 結論

上來說き来った所を整理、要約なして本稿の結論とする。

語源的意味の最も顕著に看取される「剥奪」「除去」の用例より始めて、それが生理的な「苦痛」と連合して「癒し」となり、更に「激情」や「悪徳」を対象として「抑制」「節制」となり、若者を対象としては「訓練」「陶冶」「教育」の意味に傾斜し、人格形成に進んでは「躰」「礼儀」「行儀」「身嗜み」の意味合いを帯びるに到る。この中、「抑制」より「陶冶」、更に「躰」「礼節」に到る間に、我々は仏教に於いて特殊限定されて「律」となる過程を窺い知る事が出来るであろう。もと男性による女性の衣服剥奪という世俗の「性愛」の文脈から仏教の「律」に至るまで、硬軟両極に

83

*bahavo 'vinayān naṣṭā rājānaḥ saparicchadāḥ
vanasthā api rājyāni vinayāt pratipedire (40)
veno vinaṣṭo 'vinayān nahuṣaś caiva pāṛthivaḥ
sudāḥ pajjavanaś caiva sumukho nimir eva ca (41)
pṛthus tu vinayād rājyaṃ prāptavān manur eva ca
kuberaś ca dhanairśvaryaṃ brāhmaṇyaṃ caiva gādhijaḥ (MS.7.42)*

84 Cf.

*dāsāhitaka-bandhūn aśṛṇvato rājā vinayaṃ grāhayet (KAS.2.1.25)
kulāni jātiḥ śreṇīś ca gaṇāñ jānapadān api
svadharmāc calitān rājā vinīya sthāpayet pathi (YS.1.361)*

位する両者は上の文脈整理によって相互に関係づけられるものの如くである。

V.

最後に「律」を離れ、この語に関する二三の問題を扱う。

(5-1) *vi-naya*

vinaya の前接辞 *vi-* に「分離」「欠落」(*yoga:viyoga*)、「反対」(*kṛaya:vikṛaya*) の義を帰す事により、それは *naya* 無き義となる。全体を正反対の二義に解し得る様に仕組んだ爛熟期美文調作家の詩句の中に、この語を含むものが存在する。注釈を頼りに訳出すれば次の如くである。

ahitād anapatrapas trasann atimātrojjhita-bhīr anāstikaḥ
vinayopahitas tvayā kutaḥ sadṛśo 'nyo guṇavān vismayāḥ
(Śīsupālavadhā 16.7)

(善義)

「卿の如き有徳者何処にありや。悪 (*ahitād=anarthāt*) を恐れ (*trasan*) (= *adharmā-bhī*)、恥を知り (= 無恥に非ず *anapatrapa=akārya-jugupsu*)、極めて (*atimātram*) 勇敢にして (怖れを払い *ujjhita-bhī=tyaktāri-bhaya*)、来世を信じ (*a-nāstika*)、羨優れて (*vinayenānā-uddhatyenopahito viśiṣṭa=vinayavat*)、奢る事なし (*avismaya=agarva*)。

(悪義) (*paraṣa*)

「汝如き無徳者なし (*aguṇavān=nirguṇa*)、敵を恐れ (*ahitāt śatros trasan bhīru*)、恥知らず (*nāsty apatrapā lajjā-viśeṣo yasyety anapatrapo nirlajjāḥ*)、卑怯にして (= 御辞儀のみにて恐怖を払い *nati-mātreṇa praṇāmenaivojjhita-bhīr na tu prākrameṇa*)、無神論者、処世にも長けず (*vinayo nayātīto, apahito hitād apetaḥ*)、しかも傲慢なり (*vismayo vigarvo na bhavātīty avismayo garvī*)。ここに *vinaya* の語は善義に通常義 (*anauddhatya*)、悪義に「欠政略」(*nayātīta*) の両義を兼ねる。

(5-2) 特殊義

以下に筆者がこれ迄遭遇したこの語の特殊用法として二例を挙げる。

(5-2-1) 先に我々は *vinaya* に「自製の籠」の訳語を用いたが、それが「足枷」の意味に用いられた用例がある。捕えられた Vatsa 王の様子を、侍従は Pradyota 王に奏上して次の様に言う。

*āhita-vinayatvāt pādāyor aṅge tasya bahu-prahāratvāc ca skandha-
vāhyena śayanīyena madhyama-gr̥he praveśitaḥ*

(*Pratijñāyauḡandharāyaṇa 2.13 prose*)

(彼は) 両足に枷を嵌められ、満身創痍なれば、担架で中央館に担ぎ込まれた。

Woolner は “He was so tractable” と英訳しているが、Gaṇapati shastri の注は *āhita-vinayatvād vinīyate 'nenāparādhīti vinaya iha nigalaḥ, sa āhito niveśito yasya sa āhita-vinayaḥ* と釈して *vinaya=nigaḡa* とするから、ここでは「足枷」の意味に取る方がよい様に思われる。⁸⁵ 我々はこちらにも「除去」「解放」の原義 (*vi-nī-*: take off, deliver) より出発したものが、「律」(control) を経由して、終局的に原義と凡そ生反対の「拘束」(restraint) の義にまで発展して行ったこの語の運命を知る如くである。

(5-2-2) 過去分詞 *vinīta* も、通常の「行儀よい」の義を離れて “stretched” (Sh. Pollock) と訳される場合がある。有名な誘拐の場面で Sītā は誘惑に駆られて次の様に言った。

nihatasyāsyā sattvasya jāmbūnada-maya-tvaci

śaṣpabr̥syāṃ vinītāyām icchāmy aham upāsītum (R.3.41.19)

金色の肌なすかの鹿を討取り、それを草の褥として拵げた上に、私は座ってみたいの。

(5-3) 類語を畳み掛けて重ねるのは叙事詩以来の伝統であるが、*naya-vinaya-* もその例外ではなかった。その際、前接辞 (*upasarga*) を伴うこの畳み掛けの第二語を如何なる意味に取るかは訳者の判断によるが、類

⁸⁵ Trivandrum Sanskrit Series 1920 p.63.

似の用例に徴して「各種」の義にとり、この語を字義通りに「律」の意味には取らない方がよい場合がある。今、畳み掛けの類例を挙げれば以下の如くである。

(5-3-1) *vana-*, *upavana*

王子の去った都の情景を謳った以下の章句に在っては、確かに *vana* と *upavana* の両語は対蹠的に「森」と「庭園」の義を示している。

sapuṇḍarīkair api śobhitamjalair
alamkṛtaṃ puṣpadharair nagair api
tad eva tasyopavanaṃ vanopamaṃ
gata-prahaṛṣair na rarāja nāgaraiḥ (Buddhacarita 8.6)

水は蓮華湛えて華やぎ、木々は花を咲かせて着飾るも、その庭園たる、最早町人喜ばざれば、森に等しきものと化す。

ここで第二語を「畳掛け」と取らない方がよいと思われるが、⁸⁶ 以下の叙事詩の章句に在って両語は必ずしも対蹠的位置に立っていない様に思われる。

punaś ca ramaṇīyeṣu vaneṣūpavaneṣu ca
damayantī saha nalo vijahārāmaropamaḥ (MBh.3.54.37)

神に等しき Nala 王は、Damayantī と連れ立って、心地よき森の彼方此方に、愉しい日々を過ごしました。⁸⁷

それは「各種の森」、邦語の「森や林」程度の意味に取って差し支えないであろう。

前接辞 *upa-* が必ずしも特定の意味を持たぬ事は、叙事詩にしばしば繰返される *upopa-viś-* の用例に徴しても明らかであるが、それは又再度に

⁸⁶ *Naṭya-śāstra* 第八章には舞台に於ける俳優の首の動かし方に13種を挙げる (*śiro' bhīnyasya trayodaśa bhedaḥ*) が、その中に *kampita* : *ākampita*, *dhuta* : *vidhuta*, *parivāhita* : *udvāhita*, *ādhūta* : *avadhūta*, *añcita* : *nihanācita* の五種を区別し対比させている。この中、*ākampita* には首の緩慢な (*śanair*) 動き、*kampita* には迅速な (*dhuta*) 動きを配し、同様に *dhuta* は緩漫 (*śanaiḥ*)、*vidhuta* 迅速 (*druta*) 等と区別しているから、畳み掛けと言ってもここでは明らかに前接辞に特殊な意味合いを帰している事が判明する。

⁸⁷ forests and gardens?

亙り *Buddhacarita* に現れる。

upopaviṣṭaṃ pathi vr̥kṣa-mūle sūryaṃ ghaṇābhogam iva praviṣṭam
(*Buddhacarita* 9.8cd)

upopaviśyānumataś ca tasya bhāvaṃ vijijñāsur idaṃ babhāṣe
(*Buddhacarita* 10.21cd)

ここに前接字 *upa-* は独立の意味を持たず、唯単に先行する語の意義を強調するに留まる。⁸⁸

(5-3-2) 同様に邦語の「四方八方」に相当する梵語の用例は *diś-*, *vi-diś-* に見る事が出来る。

sā rāja-bhujā-nirmuktā nirmuktoraga-saṃnibhā
prajvālayantī gaganam diśāś ca vidīśas tathā
droṇāntikam anuprāptā dīptāsyā pannagī yathā (*MBh.*7.81.31)

王 (Yudhiṣṭhira) の腕より放たれた槍 (*śakti*) は、恰も脱皮せる蛇の如く、天 (=虚空) と四方八方を燃え上がらせつつ、Droṇa の側に飛んで行った、恰も口から火を噴く雌蛇の如くに。⁸⁹

dīpo yathā nirvṛtim abhyupeto naivāvaniṃ gacchati nāntarikṣam
diśaṃ na kāṃcid vidīśaṃ na kāṃcit sneha-kṣayāt kevalam eti śā-
ntim (*Saundarananda* 16.28)

恰も油が切れれば灯火が消え、天にも地にも、四方八方何処にも赴く事無く、鎮まる以外に無きが如くに。⁹⁰

同様の用例は *diś-*, *upadiś-* (*MBh.*2.35.25, 3.168.5), *diś-*, *pradiś-* (*MBh.*6.89.6, 7.171.20, 7.172.22)、⁹¹ 更に *diś-*, *pratidiś-* (*MBh.*6.53.5) にも見得るが、これらの用例にあって後続の前接辞 (*vi-*, *upa-*, *pra-*, *prati-*) は特別の意味を持たない。

(5-3-3) *śeṣa-*, *viśeṣa*

rājño 'pi vāso-yugam ekam eva kṣut-saṃnirodhāya tathāṇna-mātrā

⁸⁸ Cf. Hara 2000 (2) :*niśad:upaniśad*.

⁸⁹ Cf. *MBh.*13.151.27, H.31.37, R.6.66.27.

⁹⁰ Cf. *Saundarananda* 16.29.

⁹¹ Cf. also *diś-* *sapradīś* in 7.102.62.

śayyā tathaikāsanam ekam eva śeṣā viśeṣā nṛpater madāya
(*Buddhacarita* 11.48)

王も又身に付け得るは一對の衣、摂取するは空腹を充たすのみ、同じく座すに椅子一つ、休むに寝台一つあれば足りる。諸々の残余は彼の奢侈に資するのみ。

最後の部分を Johnston は The other luxuries of king lead only to the intoxication of pride と取っているが、これを上例に倣って前接辞の畳み掛けと取って上の如く “the rest and various rests” の義に翻案する事も又可能である。

(5-3-4) *dhātā-, vidhātā*⁹²

Skanda Kārtikeya の即位式に参列する諸神を列举する條で、

indrā-viṣṇū mahā-vīryau sūryā-candramasau tathā
dhātā caiva vidhātā ca tathā caivānilānalau (*MBh.*9.44.4)

大力無双の Indra, Viṣṇu、それに日月、風神火神の諸神⁹³

通常 creator and distributor と翻案されるが、第二語は単に先行する第一語を強めるに資すと取る事も不可能でないように思われる。

(5-3-5) *jñāna-, vijñāna*

その様な立場から嘗て F. Edgerton が *Vetāla-pañcaviṃśatikā* の「三人の求婚者」物語の用例と、Śaṅkara の *Gītā* 註に見える *anubhava* の語を手懸りとして提唱した両語の解釈を見たら如何であろうか。彼が現在の「基礎」と「応用」に相当する「理論的知識」(theoretical knowledge) の解釈を前者に、「応用的知識」(practical knowledge) を後者に配した事は周知の事実であるが、⁹⁴ *Bhagavad-gītā* に見えるこの畳み掛け (*jñāna-vijñāna-nāśana* [3.41], *jñāna-vijñāna-trpātātmā* [6.8]) をこの立場から解釈すると、それは先行する *jñāna* をただ強調敷衍するものとなろう。

⁹² Cf. Durga ad Nirukta 11.11 (*dhātaiva vidhātā*) as quoted in Dhadphale, p.223.

⁹³ Cf. *MBh.*7.69.46, 13.15.31, 13.145.39 (*sa dhātā vidhātā...*), 3.249.4 (*dhātur vidhātuḥ*), 12.224.49 (*dhātaiva vidadhāty uta*).

⁹⁴ Edgerton 1933.

その際はせいぜい「諸学」「諸知識」の義となる道理である。⁹⁵

(5-3-6) *naya-, vinaya-*

この視点からこの両語を見れば、それは「各種」*naya* となり、必ずしも「政略、処世術」と「律」の二義に取らなくともよい様に思われる。

(5-3-6-1) 愛妻 *Sitā* を奪われ、悲しみの余り激昂する *Rāma* を宥める弟 *Lakṣmaṇa* の言に次の如く言われる。ここには戒 (*śīla*) と律 (*vinaya*) の語が並んで現れている事は注目に値するが、Sh.I.Pollock が推測した様に本文の読みには疑問がある。

*śīlena sāmṇā vinayena sītām
nayaena na prāpsyasi cen narendra
tataḥ samutsādaya hema-puṅkhair
mahendra-vajra-pratimaiḥ śaraughaiḥ*

(R.3.61.16)

平和的手段、和解、各種の策略によっても *Sitā* を得られぬその折に、初めて卿は大帝釈天の金剛杵の如き黄金の矢羽の矢の洪水もて (彼を) 殲滅せよ。

ここに第一行の外交手段は第二行の戦火と対比されるから、*śīla* は寧ろ通常の「賄賂」(*dāna*) に相当すると思われる。尚 Pollock を *vinaya* を *tact*、*naya* を *diplomacy* と英訳しているが、これを上記の如く「畳掛け」の義に取る事も可能であろう。

(5-3-6-2) 最も典型的な例は、戦いに敗れてしかも王を「敵軍に捕われの身」としてしまった宰相の復讐の誓に見出される。

*kṛtvā nayaiś ca vinayaiś ca śaraiś ca karma
śatroḥ śriyaṃ ca suhr̥dām ayaśaś ca hitvā
prāpto jayaś ca nṛ-patiś ca mahāṃś ca śabdah*
(*Pratijñāyagandharāyaṇa* 4.6)

各種の手練手管を用い、又時に飛び道具を駆使して、敵の栄光と味方の不名誉を除き、勝利と王、更に大なる名声を取り返さん。

⁹⁵ Cf. MS.9.41: *tat-prājñena vinītena jñāna-vijñāna-vedinā*

ここに *vinaya* の語は *naya* の前接辞疊掛けによる強調に他ならず、「各種の *naya*」、即ち「政略各種」の義で後続の武器 (*śara*) の行使 (*karman*) と対比される。

(5-3-6-3) 但し次下の二例に於ける両語の解釈は微妙である。そこには「各種」の義は見出し難い。

Rāma に撃たれた Vālin は彼の卑劣な戦法を非難して言う。

nayaś ca vinayaś cobhau nigrahānugrahāv api
rāja-vṛttir asaṃkīrṇā na nṛpāḥ kāmā-vṛttayaḥ (R.4.17.28)

政略と自制、懲罰と恩赦の両者。王の振舞いは混同さるべからず。王に勝手な振舞いは許されず。

これに対して Rāma は答える。

nayaś ca vinayaś cobhau yasmin satyaṃ ca susthitaṃ
vikramaś ca yathā-drṣṭaḥ sa rājā deśa-kālavit (R.4.18.8)

政略と自制の両者、真実と勇敢、これらを(聖典に)見る如くに正しく具えたる王こそ、時と場合を知る者なり。

この二つの文章に在って Lefeber/Goldman は *naya* と *vinaya* に “statesmanship” と “restraint (humility)” の訳語を当てているが、両者はここでは明らかに相互に対立する概念となっている (cf. *nigraha : anugraha, satya : vikrama*)。

文脈によっては常に必ずしも前接辞付加による先行語強調と取り得ぬ場合もあるが、他に例のある事でもあるので、⁹⁶ 時に *naya, vinaya* を「政略各種」の義に取る事が可能の様に思われる。⁹⁷

⁹⁶ Cf. Dhadhphale, (*akiranti, ajjhokiranti, abhippakiranti*), (*neti, vineti anuneti*) [p.217], (*kampi, saṃkampi, sampakampi*) [p.222], (*jhāyanti, pajjhāyanti, nijjhāyanti, apajjhāyanti*) [p.225]; (*vicārya=saṃcārya* (R.4.14.2)), (*viyoga=yoga*) [p.218], (*saṃdeha=deha*) [p.226], and Allon, (*kampati, saṃkampati, saṃpakampati*) (DN.II 109) [p.199 note and p.248].

⁹⁷ この他、*naya-*, *vinaya-* の用例を列挙すれば、以下の如くである。

tejasā yaśasā buddhyā nayena vinayena ca
janmanā tapasā vṛddhas tasmāt sarvatra pūjitaḥ (MBh.12.223.8)

Abbreviations

- H. : The *Harivaṃśa* (Poona Critical Edition), unless otherwise indicated.
- MBh. : The *Mahābhārata* (Poona Critical Edition).
- MS. : *Manusmṛti* (NSP).
- R. : The *Vālmīki Rāmāyaṇa* (Baroda Critical Edition), unless otherwise indicated.
- YS. : *Yājñavalkya-smṛti* (NSP) .

*tāṃ nayena ca saṃpanno dharmeṇa vinayena ca
uvāca rājā kaikeyīm samīkṣya vyathitendriyaḥ (R.2.37.5)
tejo dhṛtir yaśo dākṣyaṃ sāmartyaṃ vinayo nayaḥ
pauruṣaṃ vikramo buddhir yasminn etāni nityadā (R.6.128.82 Bombay)*

Kaṃsa の豪語に次の如く言われる。

*ahaṃ balena vīryeṇa nayena vinayena ca
prabhāveṇaiva śauryeṇa tejasā vikrameṇa ca
satyena caiva dānena nānyo'sti sadṛśaḥ pumān (H.73.822*7-9 on p.473)*

Kṛṣṇa を描いて、

*manuṣyāṇāṃ mono-bhūtas tapo-bhūtas tapasvinām
vinayo naya-vṛttānāṃ tejas tejasvinām api (H.30.36)*
人間の心、行者の行、政略家の律(？)、勇者の気力。

cf. *manuṣyāṇāṃ mano-bhūtas tapo-bhūtas tapasvinām
vinayo naya-trṛptānāṃ tejas tejasvinām api (Vāyu-purāṇa 97.42)*

In the story of Soma's (the moon) abduction of Tārā, the wife of Bṛhaspati, the word *vinaya* is used with *anaya*.

*tasya tat prāpya duṣprāpyam aiśvaryaṃ muni-satkṛtaṃ
vibabhrāma matis tāta vinayād anayāhatā (H.20.28)*

聖者も尊ぶ得難き主権を手にして、彼の判断は不謹慎 (*anaya*) の故に礼 (*vinaya*) より逸脱せり。

Bibliography

- Allon, M. : Style and Function, A study of the dominant stylistic features of the prose portions of Pali canonical sutta texts and their mnemonic function (Tokyo 1997) .
- Dhadphale, M. G. : Synonymic Collocations in the Tipiṭaka : A Study (Poona 1980) .
- Edgerton, F. : “*jñāna* and *viññāna*,” Festschrift M.Winternitz, (Leipzig 1933) pp.217-220.
- Hacker, P. : “*Ānvīkṣikī*,” in *Kleine Schriften* (Wiesbaden 1978), pp. 137-166.
- Hara, M. 1968 : “A Note on the Sanskrit Word *jana*,” Festschrift F.J.B.Kuiper (The Hague 1968) pp.256-269.
- 1992 : “*Śraddhā* in the Sense of Desire,” Festschrift J.May (Asiatische Studien 46/1) (1992) pp.180-194.
- 1996 : “A Note on the Epic-Phrase *jīvan-mukta*,” Adyar Library Bulletin 60 (1996) pp.181-197.
- 2000 (1) : “A Note on the Compound *krodha-mūrchita*,” Festgabe A.Mette (Swisttal-Ordendorf 2000) pp.343-357.
- 2000 (2) : “Two notes on the word *upanīṣad* in the Mahābhārata,” *Studia Indologica* 7 (S. Schayer Volume) (Warszawa 2000) pp.157-169.
- 2002 : “The Hindu Concept of Friendship, A Note on Sanskrit *praṇaya*,” *Rivista degli Studi Orientali* 75 (2001) pp.157-187.
- 2004 : “*śāstra* versus *śastra*,” Gedenkschrift J.W. de Jong (Tokyo 2004) pp. 49-64.
- Norman, K.R. : “Theravāda Buddhism and Brahmanical Hinduism,” K.R.Norman, Collected Papers, volume IV (Oxford 1993) pp.271-280.

Summary

A Note on the Sanskrit Word *vinaya* (English Summary)

By Minoru Hara

Here are discussed various semantic facets of the word *vinaya* in classical Sanskrit. An attempt is also made to analyse and place the term *Vinaya* (in its sense of 'Basket of Discipline' as one division of the Buddhist Tripiṭaka) in this larger context. The original meaning of *vinaya* is simply 'removal' (from the verbal root *vi-nī-* 'to take away'). This can be seen in a compound *uttarīya-vinaya* 'taking away the upper garment' [so that the beloved woman's breast can be seen] occurring in a romantic verse of the Śīsupālavadhā 10. 42 (cf. also, *ambaraṃ vinayataḥ* in 10. 62). The paper examines how this original meaning, which, as exemplified here, may acquire romantic or even erotic connotations, came to be related to the Buddhist in the sense of 'moral discipline.' Here are the main semantic areas of the word:

- (1) Removal (*vinaya, vinayana, vi-nī-*)
 - (1-1) Removal of physical pains (=healing): in construction with *trṣṇā, adhva-śrama,* and *kapola-kaṇḍu* (of an elephant).
 - (1-2) Removal of mental pains: *duḥkha, jvara, āyāsa, hṛdaya-granthi, bhaya.*
 - (1-3) Removal of fighting valour: *yudhha-śraddhā, darpa.*
 - (1-4) Removal of vices:
 - (1-4-1) Pali texts: *pāpa akusala dhamma* in general, i. e., *rāga, dosa, moha, icchā, kodha, makkha, sāṭheya, māyā, asmi-māna, upanāha, pipāsā.*

(1-4-2) Sanskrit uses:

(1-4-2-1) *vinīta+rāga, moha, krodha, harṣa, roṣa, tṛṣṇā, kilbiṣa*. Cf.
also *vinītātman, vinīta-veṣa*.

(1-4-2-2) *manyu, asūyā, mada, krodha, māna, īrṣyā, vega*.

(2) Control

(2-1) Taming of the wild animal: elephant, horse, ox.

(2-2) Breeding of child: *śaiśava, śīsutva, bāla-bhāva, (abhinava-)*
yauvana, etc.

(2-3) Training of warriors: *hasty-aśva-ratha-praharaṇa-vidyā-*
astra-
of courtizans: *kalā*.

(2-4) Education in general.

(2-5) Education in decorum in particular (*vinaya-saṃpanna*, etc.)

(3) Its opposites.

(3-1) *a-vinaya*.

(3-2) *dur-vinīta*.

(3-3) *vinaya and avinaya*.

(3-4) *vinaya* as a son of *dharma* and *lajjā*.

(4) Conclusion

The usage of *vinaya* started from the meaning of 'taking away' or 'removal' of a concrete thing (which, in *uttarīya-vinaya*, may refer to a woman's upper garment) and gradually came to encompass more abstract notions as pain (*duḥkha*, etc.), and then vices in general (*akusala dhamma*). The term eventually came to be imbued with connotations of self-control or discipline, particularly referring to decorum, and it is this sense which is reflected in the Buddhist technical sense of *Vinaya*.

(5) Miscellanea

- (5-1) *vi-naya* in the sense of the negation of *naya* (Śiśupālavadha 16.7).
- (5-2) *vinaya* in the sense of *nigaḍa* (Ganapati sastri) (*Pratijñā-yaugandharāyaṇa* 2.13 prose: *āhita-vinayatvāt pādāyor...*). It is remarkable that the original meaning of “setting free” (*vi-nī-*) finally developed into its opposite, that is “setting hold of” through “restrain and control.”
- (5-3) *naya* and *vinaya*: *vi-naya* as an intensified form of *naya* in the sense of “various sorts of *naya*,” instead of “policy and decorum.” Cf. similar constructions in Sanskrit such as *diś* and *vidiś*, *jñāna* and *vijñāna*, *śeṣa* and *viśeṣa*, *dhātā* and *vidhātā*.

Professor,
International College
for Advanced Buddhist Studies